

volume

111

OCTOBER

2009

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Yada 52-1, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526 Japan

inside NEWS



オープンキャンパス 開催！

●CONTENTS●

オープンキャンパス	1	・夏休み親子環境教室	15
県民の日イベント	2	・静岡かがく特捜隊 夏まつり09	15
USフォーラム	3	・サマースクール2009	16
名誉教授、教員人事、客員教授の紹介	6	・食育アドベンチャーランド	17
産学官連携推進会議	6	奨学金をありがとうございました	18
グローバルCOEプログラム		活躍する卒業生・修了生	21
・SHEPに参加して	7	科研費採択状況(追加)	24
国際交流		研究助成採択	24
・第7回SSEPを終えて	9	受賞	25
・リール政治学院留学体験記	11	図書館だより	27
・日韓天然物化学談話会	13	コンビニ商品の企画・開発に携わって	29
経営情報学部教育実習報告	13	スウェーデン訪問記	30
夏休み行事いろいろ		研究成果が雑誌の表紙に	30
・ファーマカレッジ	14	国際関係学部「学生活性化プロジェクト」採択決定	31
・オープンレクチュア	14		

— ようこそ、静岡県立大学へ — 2009オープンキャンパス開催

8月7日(金)、8日(土)、9日(日)、10日(月)及び9月13日(日)の5日間、オープンキャンパスを開催し、大学内は高校生や保護者の方など約3,800人の参加者で賑わいました。例年通りの酷暑の日だけでなく、台風の接近による大雨の日もあり、また駿河湾地震発生日予定されていた看護学部については9月に延期して開催するなどハプニングも起こりました。

学部紹介・入試説明・学生生活の紹介・在学生との懇談会・キャンパスツアー・模擬講義などを通して、参加者が県大生になった自分の姿を思い描けるよう、各学部が趣向を凝らしたプログラムを実施しました。

参加者からは、「落ち着いた環境で勉強に適している大学だと思った」「施設・設備が素晴らしい」「先生方が熱心で好印象」「講義が面白かった」「在学生・先輩の話がとても参考になった」「質問にとても丁寧に答えてくれてうれしかった」「HPを見ても実感がわかなかったが、参加してみているいろいろな不安がなくなった」など主催者側としてはうれしい感想をたくさんいただきました。

大盛況に終わったオープンキャンパスですが、参加者数が年々増加している中で、参加者の満足度をいかに上げていけるか、アンケート結果の分析を通して検証を行い、来年度へ繋げていきたいと考えています。



〔薬学部〕 実験室へ案内



〔食品栄養科学部〕 模擬講義



〔国際関係学部〕 体験学習



〔経営情報学部〕 懇親会



〔看護学部〕 妊婦疑似体験

県民の日イベント

私たちのふるさと静岡県が現在のような形でスタートしたのは、1876年8月21日。そこで、“いま”の静岡県はもちろん、“過去”の歴史にふれたり、“未来”の姿を考えたり、静岡県を身近に感じる機会になればと、8月21日(金)を中心に県内各地で色々なイベントが開催されました。本学では、大学構内見学会の「キャンパスツアー」が行われ、短期大学部では、「年金講演会・健康度測定フェア」と「大学見学会」が行なわれました。

県大をもっと身近に!! 「キャンパスツアー」開催

キャンパスツアーは、県民の方々に対して、学内を見学していただき、県大に親しみを持ってもらうことを目的に開催しています。

本年は、8月21日(金)に開催し、県内各地から、また小学生から会社員の方まで73人の多数の参加がありました。参加者は4グループに分かれて、大学職員の誘導により各学部棟や図書館を見学しました。

参加者からは、「施設設備も充実していて、県大の学生さんたちは恵まれているなと思いました」「先生方からは研究にかける熱意を感じました」「県立大学に入学したい気持ちが高まりました」などの声が聞かれました。



薬学部研究室ごとのパネル展示



看護学部実習室の見学



お茶に関する体験実験



パソコン実習の体験



健康支援センターで肩こり解消運動

短期大学部

短期大学部では、年金講演会・健康度測定フェアと大学見学会を行ない、小鹿町内会住民の方々や高校生等に参加していただきました。年金講演会では、社会福祉学科教員により「よくわかる年金のしくみ」と題して、パワーポイントを使った説明を行い、健康度測定フェアでは、身長腹囲測定、血圧測定、体成分分析、骨密度測定を行い、希望者に本学教員による健康相談・歯科相談・食事相談・介護相談を行ないました。また、大学見学会では、高校生と保護者を中心に、キャンパス内の施設等の見学と進学相談を行ないました。



健康度測定フェア

USフォーラムの開催について

USフォーラム実行委員長 出川雅邦

8月4日(火)及び5日(水)の両日、USフォーラム2008が本学看護学部棟4階13411講義室等で開催されました。

今回のフォーラムでは、平成20年度に採択された学内の研究費（教員特別研究推進費、学部研究推進費）の研究成果について、口頭発表54件とポスター発表75件の合わせて129件の発表が行われました。また、平成20年度に文部科学省から採択されたグローバルCOE拠点およびGPプロジェクトについて、それぞれの活動状況等を報告いたしました。

本フォーラムは学外の皆様にも広く公開されており、本学教員、学生はもとより一般県民、企業関係者など2日間で延べ449名の方々が熱心に聴講されました。

聴講者数

(単位：名)

区分 日別	本学教員	本学学生	一般県民・ 企業・研究機関等	計
8月4日(火)	160	48	35	243
8月5日(水)	109	66	31	206

USフォーラムは、本学における研究成果を発表する場として定着してきており、他部局における研究内容やアップトゥーデイトな研究成果を聴講できる有効な機会となっております。各学部・研究科・研究所における専門的な研究はもとより部局横断的なテーマもあり、興味ある多くの成果が発表されました。

USフォーラムをはじめ、本学における日頃のたゆまぬ研究に対する熱意と努力が、グローバルCOEプログラムの採択に結びついたものと思われまます。

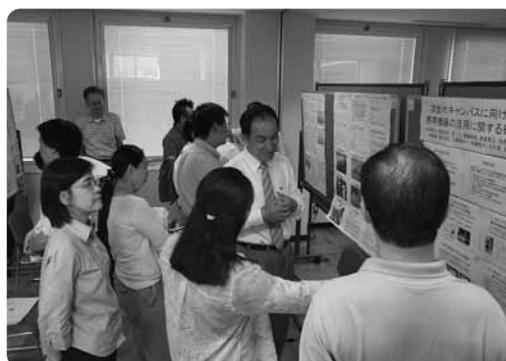
次回のUSフォーラムにおいては、この成果発表が益々活気あるものになることを期待しています。



木苗学長による挨拶



口頭発表



ポスター発表

USフォーラム2008 発表プログラム <8月4日(火)>

木苗学長挨拶

グローバルCOE拠点リーダー報告 薬学研究科 教授 今井康之

平成20年度教員特別研究推進費・学部研究推進費採択研究課題 口頭発表

No.	学部	代表者職・氏名	テ ー マ
1	薬学	講師 江木 正浩	複素環化合物の効率的かつクリーンな合成法の開発
2	薬学	助教 井川 貴詞	シリルベンザインを用いた多環式芳香族ポリオール類の合成研究
3	薬学	講師 三宅 正紀	リファンピシン含有マイクロスフェアの設計と細胞内寄生細菌に対する抗菌効果
4	薬学	助教 黒羽子孝太	経鼻投与リボソームを用いたペロ毒素に対する特異的分泌型IgA抗体の産生誘導
5	薬学	教授 山田 静雄	薬剤誘発膀胱炎モデルにおける受容体異常と抗炎症薬の作用
6	薬学	講師 加藤 安宏	高度侵襲手術後栄養療法における脂肪乳剤の緩徐投与による栄養状態及び免疫能への影響
7	薬学	講師 梅原 薫	タイ薬用植物由来フラボノイドのステロイドホルモン生成に及ぼす影響の検討
8	薬学	助教 清水 広介	機能的リン脂質ホスファチジルイノシトールの体内動態解析と肥満抑制効果
9	薬学	准教授 石川 吉伸	テロメア四重鎖DNAを標的とするカチオン性ポリマーの抗腫瘍細胞増殖能
10	環境	准教授 谷 幸則	Mn酸化真菌Acremonium sp.KR21-2によるレアメタル類の濃縮回収
11	環境	教授 坂口 真人	低環境負荷を指向した無溶媒固相反応によるバクテリアセルロースの新規機能性材料の創製
12	環境	准教授 谷 晃	静岡県森林環境の特徴解明のための化学的側面からの研究-PTR-MSを用いた測定法の確立
G Pプロジェクトリーダー報告 短期大学部 准教授 松平千佳			
13	国際	教授 犬塚 協太	静岡県立大学における男女共同参画の推進に関する基礎的研究
14	国際	教授 玉置 泰明	静岡県内外国人児童生徒の教育問題に関わる実践的研究-担当教師に対するアンケート調査結果から-
15	国際	教授 伊豆見 元	北東アジアの国際関係
16	国際	教授 五島 文雄	中国の台頭と東南アジア - ベトナム、ラオス、カンボジア -
17	国際	教授 小幡 壮	無形文化遺産としての口頭伝承文化
18	国際	准教授 剣持 久木	仏独共通歴史教科書現場調査結果報告と今後の展望
19	国際	准教授 藤巻 光浩	先住民博物館の人権化の可能性~遺品・遺骨返還 (repatriation)の理論と実践~
20	国際	教授 小久保康之	E Uのリスボン条約の批准プロセス:アイルランドにおける批准拒否を中心に
21	経情	教授 芹沢 幹雄	静岡県立大学学生の体力と健康に関する研究
22	経情	助教 大久保誠也	量子セルオートマトン変換に基づく情報処理方式の確立
23	看護	准教授 奥原 秀盛	病棟師長のストレスと対処に関する研究
24	看護	教授 小寺 栄子	一般病院の組織管理者の看護部門トップ・マネジャーの経営管理行動に対する認識
25	短大	准教授 吉田 直樹	本学学生・県内高校生・学び直したい社会人に対する分子生物学実験体験の導入に関する研究
26	短大	准教授 江原 勝幸	多層的ネットワークを活用した高齢者虐待問題への支援に関する研究 ~地域包括支援センターの機能強化にむけて~
27	短大	教授 松尾ひとみ	心臓手術後に水分制限をうけることもへの「飲みたい時に飲む」ケアのガイドライン開発

平成20年度教員特別研究推進費・学部研究推進費採択研究課題 ポスター発表

No.	学部	代表者職・氏名	テ ー マ
1	国際	助教 近藤 隆子	静岡県立大学In-House English Placement Testの開発
2	国際	講師 宮崎 晋生	産業政策と企業家精神の国際比較序論:「市場の失敗」と「政府の失敗」の狭間で
3	国際	准教授 澤田 敬人	デカセギで来日するブラジル等南米日系人の定住化傾向と子弟の教育:静岡県内外国人集住地区に於ける南米系在留者第二世代の就学実態調査と問題解決への示唆
4	国際	講師 松森奈津子	近現代スペイン国家形成とマイノリティー動員と排除の論理
5	国際	教授 大澤 隆幸	「漂流」草稿の翻案・その特色と作品との関係
6	国際	助教 佐藤真千子	民営化した民主化支援の実態と問題-フリーダム・ハウスの事例から
7	国際	教授 園田 明人	「防衛的ベシミズム」測定尺度の開発:動機づけやストレス適応に影響すると考えられる個人変数の基礎調査
8	国際	教授 西山 克典	国際社会における黄禍論の展開-ロシアとヨーロッパ、東アジア
9	国際	准教授 大楠 栄三	書き出しと作中人物導入手法の研究:バルド=バサンの初期小説における変容過程の分析
10	国際	准教授 湖中 真哉	アフリカを対象としたスタディー・ツアーの研究
11	経情	教授 池田 哲夫	次世代キャンパスに向けた携帯機器等の活用に関する研究
12	経情	講師 森 勇治	博物館学における博物館経営論の位置づけ
13	看護	助教 酒井見名子	静岡県における防災教育のあり方に関する研究 (継続)
14	看護	助教 繁田 佳映	排泄ケアが高齢者の皮膚へ及ぼす影響についての検討
15	看護	教授 三輪真知子	乳幼児虐待予防のための保健師と研究者との協働事例検討会
16	看護	准教授 野村 千文	高齢者ケアの質向上をめざした施設内研修システムの構築:施設内研修実施後の職務満足感の変化
17	看護	助教 濱井 妙子	地域医療における在住ブラジル人の受診環境とニーズ
18	看護	助教 山田 貴代	保険診療で入院した外国人と日本人の医療費の支払い状況の比較
19	看護	准教授 太田 尚子	ペリネイタル・ロスケアに関する看護教育プログラムの評価
20	看護	講師 日吉 孝子	地域における新型インフルエンザ流行対策のための看護師の危機対応に関する意識調査
21	短大	講師 木林美由紀	小学生の咀嚼力と新体力テストとの関連性
22	短大	教授 石野 育子	介護過程におけるアセスメントに関する研究
23	短大	准教授 鈴木 琴江	一般看護師のための化学療法教育プログラムの開発
24	短大	助教 石垣 範子	A県訪問看護師による在宅退院患者とその家族への退院支援に関する実態調査
25	短大	講師 前野真由美	外国語で受診できる診療所における外国人医療の問題とその支援
26	短大	准教授 鈴木 温子	介護サービスを提供する介護スタッフのリスクマネジメントに関する研究
27	短大	講師 千綿かおる	知的障害者施設職員の歯磨き介助負担感を軽減するための支援
28	短大	講師 那須 恵子	「おやすみ体操」の睡眠・覚醒リズムへの影響について
29	短大	講師 内藤 初枝	「ピンゴ式食事管理シートおよび料理換算補助ツール」を活用した食事管理の効果について -食事分析効果と食事改善への試み-
30	短大	教授 藤原 愛子	保護者の行動と子どもの触触本数との関連性
31	短大	講師 中澤 秀一	自立可能な社会制度
32	短大	准教授 三富 道子	介護職員のスキルアップのための介護における動作に関する教育プログラムの検討
33	短大	教授 漁田 俊子	FD実施のための土台造りと授業改善研修プログラム

USフォーラム2008 発表プログラム <8月5日(水)>

平成20年度教員特別研究推進費・学部研究推進費等 採択研究課題 口頭発表

No.	学部	代表者職・氏名	テ	マ
1	薬学	助教 横山 英志	膜タンパク質	ストマチンの特異的切断プロテアーゼの二量体構造
2	薬学	教授 豊岡 利正	蛍光標識化液体クロマトグラフィー	質量分析法によるデザイナードラッグの高感度分析
3	薬学	講師 稲垣 真輔	DNA中に存在する	損傷核酸塩基の高感度分析法および新規スクリーニング法の開発に関する研究
4	薬学	准教授 左 一八	細胞表面グリカン	生成阻害剤の探索と阻害作用機序の解明
5	薬学	教授 並木 徳之	改良型ファモチジンOD錠「サワイ」	の臨床製剤学的評価
6	薬学	講師 五十里 彰	マグネシウムチャンネル	の発現調節機構の解明と細胞増殖に対するマグネシウムの影響
7	薬学	助教 山崎 泰広	高カロリー食摂取マウスにおける	肝コレステロールトランスポーターAbcg5/8発現変動の解析
8	薬学	教授 宮瀬 敏男	茶カテキンのモノクローナル抗体	作成用のカテキン誘導体の作成研究
9	薬学	准教授 武田 厚司	亜鉛ならびにテアニンによる	海馬長期増強の調節
10	薬学	准教授 齊藤 真也	PDE阻害効果を目標としたお茶	の有効成分研究
11	薬学	教授 鈴木 隆	インフルエンザウイルスの受容体	結合性解析に最適な糖鎖プローブの確立
12	環境	助教 寺崎 正紀	静岡市内の公営プール水で検出	される塩素化パラベン受容体原性毒性評価
13	環境	准教授 雨谷 敬史	環境中のハイルリスク因子・	ハロゲン化多環芳香族炭化水素の評価に関する研究
14	環境	准教授 伊吹 裕子	エピジェネティクス異常を標的	とした新規光力学治療法に関する研究
15	環境	助教 唐木晋一郎	腸内環境制御機構	一大腸管腔内化学物質の受容機構
16	食品	助教 石井 剛志	α -リポ酸による	蛋白質レドックス制御機構の解析
17	食品	准教授 増田 修一	アクリルアミドの生成及び	毒性発現に対する静岡県産地場産品の抑制効果
18	食品	教授 小林 裕和	すべて植物由来の遺伝子を用いた	植物ポリフェノール合成の増強
19	食品	助教 成川 真隆	L-theanineのうま味相乗効果	の有無
20	食品	教授 大島 寛史	2型糖尿病モデルラットにおける	DDAH活性変動と血中インスリン濃度の関連
21	食品	助教 三好 規之	ヒト生体試料中のオゾン酸化	コレステロール(atheronal-A、B)の定量分析 ～メタボリック症候群新規バイオマーカーとしての評価～
22	食品	准教授 小林 公子	血圧値の決定に影響を与える	遺伝要因と食生活
23	食品	教授 横越 英彦	食品成分が異なるニューロ	トランスミッションを同時に惹起する機序解析 ～緑茶テアニンの興奮性および抑制性神経伝達機序の解明～
24	食品	助教 大川 栄重	慢性腎不全ラットを用いた	低蛋白食事療法でのmTORを介した腎保護メカニズムの検討
25	食品	教授 熊谷 裕通	静岡県における腹膜透析患者	の現況とその治療に関する調査研究
26	食品	教授 合田 敏尚	機能性食品成分による代謝性	疾患リスク低減の評価のための判定指標データベースと基準食の設計
27	食品	特任准教授 Philip Hawke	Development of an iPod-based	independent listening course for science graduate students

平成20年度教員特別研究推進費・学部研究推進費採択研究課題 ポスター発表

No.	学部	代表者職・氏名	テ	マ
1	薬学	教授 菅 敏幸	カテキンの合成を基盤とした	ケミカルバイオロジー研究
2	薬学	講師 竹元万壽美	香り、味、水色及び機能性に	優れた低カフェイン発酵茶飲料の製造法に関する研究
3	薬学	教授 星野 稔	膵 β 細胞量の調節に対する	脂質摂取と加齢の影響
4	薬学	助教 金子 雪子	遊離脂肪酸誘発 β 細胞	アポトーシスに対する茶カテキン誘導体の作用
5	薬学	教授 山田 浩	学童における茶カテキンの	インフルエンザ予防効果の検討
6	薬学	助教 鈴木由美子	Atroviridinの全合成	
7	薬学	准教授 根本 清光	脳卒中易発性高血圧自然発症	ラットの肝コレステロール生合成/代謝異常に関する研究
8	薬学	准教授 上村 和秀	IgA腎症モデルHIGAマウス	腎糸球体におけるマンナン結合タンパク質の沈着
9	薬学	教授 伊藤 邦彦	新規がん分子標的治療薬	としてのミモトープペプチドワクチンの開発
10	薬学	教授 赤井 周司	カテコール類の水酸基から	フルオロ基への変換法の開発
11	薬学	助教 脇本 敏幸	ビール由来の α 1Aアンタゴ	ニスト、ホルダチンAの構造活性相関
12	薬学	准教授 川島 博人	高内皮細静脈特異的ヘパ	リン硫酸欠損マウスの樹立
13	薬学	講師 石井 康子	腎移植患者におけるシク	ロスポリンの血内分布に関する研究
14	薬学	講師 浅井 知浩	Dual-targeting リボソーム	を用いた腫瘍新生血管傷害療法
15	薬学	教授 菅谷 純子	医薬品の有害事象回避に	繋がる生体異物代謝酵素・トランスポーター発現調節の基礎的研究と臨床応用のための基盤形成
16	薬学	准教授 宮城島 惇夫	低カフェイン緑茶を目指した	茶成分の変動要因について
17	薬学	助教 高橋 忠伸	ウイルス結合性アシアロ	硫酸化糖脂質を介したウイルス感染機構の解明
18	食品	助教 石井 剛志	ヒト培養細胞系における	エピガロカテキンガレート標的蛋白質の探索
19	食品	助教 杉山 靖正	微生物由来の新規抗酸化	物質の合成と生理活性研究
20	食品	助教 太田 敏郎	食品成分による血管新生	抑制の分子機構解析
21	食品	助教 望月 和樹	遺伝子発現の周期性維持	に関与する転写産物の分子生物学的ならびに統計学的手法を用いた探索法の開発
22	食品	助教 井上 広子	大学生に対する生活習慣	病予防のための行動科学理論に基づいた栄養教育とその効果
23	食品	教授 中山 勉	茶油成分の分析とその	機能に関する研究
24	食品	教授 大橋 典男	西日本地域のマダニが保有	する新興感染症「アナプラズマ症」起因細菌の解析
25	食品	助教 丹羽 康夫	DNA鑑定による折戸ナス	の系統解析
26	食品	教授 酒井 坦	地場産品の香りを合成する	酵素のクローニング
27	食品	教授 大島 寛史	静岡名物「とろろ芋」による	発がん予防とその機序の解明
28	食品	准教授 市川 陽子	低GI試験食の小規模介入	試験によるメタボリックシンドローム関連指標の検討
29	食品	准教授 桑野 稔子	勤労者の生活習慣病予防・	改善のための教育的アプローチと環境的アプローチによる効果の検証
30	食品	教授 貝沼やす子	米添加パンの調製にベ	ースト状の米を利用する新たな試み
31	食品	教授 鈴木 裕一	メントールおよびその	誘導体は過敏性腸症候群の薬となりうるか？
32	食品	助教 伊藤 創平	過酸化水素による障害を	受けた、銅、亜鉛スーパーオキシドシタターゼのX線結晶構造解析
33	食品	准教授 河原崎泰昌	“リバース・プロテオミクス”	研究領域創成に向けた基盤研究
34	食品	助教 望月 和樹	機能性食品成分による小	腸消化吸収関連遺伝子の発現制御と生活習慣病の改善機構の解明
35	環境	助教 岩村 武	マイクロ波照射による	環境調和型酸化亜鉛微粒子の精密合成
36	環境	教授 坂田 昌弘	佐鳴湖に特徴的な微生物	群を考慮した生態系保全に関する研究
37	環境	教授 吉岡 寿	不織布のキトサン・	コーティング
38	環境	助教 内藤 博敬	ワサビ田流水に存在する	微生物の単離と形態および遺伝学的解析
39	環境	教授 下位香代子	ホルムアルデヒド高濃度	曝露に関する調査研究
40	環境	教授 国包 章一	静岡県の水道関連情報に	関するGISシステムの構築に関する研究
41	環境	教授 桑原 厚和	ヒト大腸における短鎖	脂肪酸受容体、GPR41の発現様式について
42	短大	講師 中野恵美子	歯科衛生士養成機関による	有病者歯科診療に関する情報提供の現状

名誉教授の称号授与

この度、名誉教授を授与された前坂俊之前国際関係学部教授、大学院国際関係学研究科教授の経歴、教育・学術的功績、本学への貢献は次のとおりです。



前坂俊之 先生 (前国際関係学部教授、大学院国際関係学研究科教授)

【経歴】

本年3月末に定年退職された前坂教授は、昭和44年3月に慶応義塾大学経済学部経済学科卒業後に、毎日新聞社に入社され、25年間にわたって新聞記者として第一線の現場で取材・報道活動に従事され、この間、ジャーナリズム、メディア、社会事件などにわたって数多くの著作を執筆されました。

平成5年4月に本学国際関係学部教授に着任され、平成6年、大学院国際関係学研究科教授兼務となりましたが、本学では各種委員会の委員を歴任され、16年間にわたり研究、教育ならびに大学の発展に貢献されました。

【教育・学術上の功績】

研究面では、専門分野のジャーナリズム、メディア関係では「戦争報道」に関して、<戦争と新聞> (2巻)『メディアコントロール—日本の戦争報道』『太平洋戦争と新聞』の一連の研究がマスコミ学会でも高く評価されて、『太平洋戦争と新聞』は講談社学術文庫に収録されました。一方で、急速に発展したインターネット、ITデジタル・メディア革命の中でコンテンツ産業育成の重要性に着目して、「ブロードバンド/ユビキタス・コンテンツビジネス」の研究をいち早く発表され注目を集めました。

教育面では、学部で「国際コミュニケーション論」「ジャーナリズム論」「ITメディア論」、大学院で「コミュニケーション研究」をそれぞれご担当になり、丁寧で熱意ある指導を实践されて後進を育成し、特に「演習」ではメディア関係に就職希望の学生のための作文指導をされ、マスコミ界に多くの卒業生を送り出されています。同時に学外においては、日本記者クラブ会員として中央でも精力的に活動され、本学の知名度のアップ、研究者間の知的交流にも大きく貢献されました。更に大学内では、広報委員会、入試実施委員会、各種委員会で活動して学内業務の円滑化、運営にも努力されました。以上のように、前坂先生は、ジャーナリズムの教育・研究、人材育成、大学運営、社会への貢献で幅広く精力的にご活躍されてきました。

教員の人事、新規客員教授の紹介

■教員の人事

●採用 (6月1日付け)	小西 英之	薬学部	助教	(5月31日付け)
田中紫葉子 薬学部 助教	(9月1日付け)	森田 洋行	薬学部	助教
(7月1日付け)	渡辺 賢二	薬学部	准教授	(7月31日付け)
佐野 文美 食品栄養科学部 助教	斉本美津子	看護学部	助教	北村 久代 薬学部 助教
(8月1日付け)	●退職 (4月30日付け)			(8月31日付け)
辻 大樹 薬学部 助教	阿部 郁朗	薬学部	准教授	ウッド小池奈津子 看護学部 助教

■客員教授

●教授		
原田 均	鈴鹿医療科学大学教授	H21.7.1~H24.3.31
神原 啓文	静岡県立病院機構理事長兼静岡県立総合病院院長	H21.8.1~H24.3.31
スキナー マーゴット	オークランド大学首席研究員	H21.9.1~H24.3.31

産学民官連携

第8回産学官連携推進会議に出展

展示会場

6月20日(土)、21日(日)に国立京都国際会館(京都市左京区宝ヶ池)で開催された、「第8回産学官連携推進会議」に出展しました。

この会議は、産学官連携の推進を担うリーダーや実務者による研究協議、情報交換、交流、展示の機会を設け、産学官連携の新たな展開を図ることを目的に毎年開催されています。

8回目となる今回は、2日間で約4,500人の来場者がありました。

展示の部では、各大学・研究機関・TLO・民間企業等による産学官連携の事例紹介、研究成果、試作品などが展示され、会議の部では、基調講演、特別講演、分科会等が行われ、パネリストによる問題提起と活発な討論が繰り広げられました。本学は本会議に初めて出展し、両日ともイベントホールの展示の部にて、産学連携について紹介しました。



本学の展示ブース



講演会場

グローバルCOEプログラム

静岡健康科学英語研修プログラム
Shizuoka Health Sciences English Program (SHEP)

SHEPに参加して

研究を進めていく上で英語は欠かせない言語だというのは言うまでもありません。ほとんどの論文は英語で書かれ、自分たちの研究成果の発表（論文投稿）も英語で行います。そのため普段の研究生活の中で自然とリーディングやライティングの力は身についていくものと思います。私はこれまでも何度か本学で開かれた英語での研究発表会に参加する機会があり、ホーク先生の丁寧な指導でプレゼンテーションには何が重要なのか、どのように発表すればいいのか、などを教えてもらいました。しかしながら、頭では分かっているがなかなかうまく行かないことも多く、質問への回答もしどろしどろになりながら切り抜けるといった調子で、スピーキングやリスニングの重要性を身にしみて感じる経験でした。

どうすれば自分の英語力を向上することが出来るのかと考えていたときに、米国・オハイオ州立大学（OSU）でのSHEP参加の募集がありました。博士課程最後の年ということもあり、なかなか時間の都合も難しい中でしたが、最後には参加して本当に良かったと思えるプログラムでした。

授業は、毎日月曜から金曜の正午までで、午後は研究のための自由な時間でした。ほぼ毎日のようにカンパセーションパートナーと会い、生の会話を行うことができました。初めのうちはどう話してよいのかが分からず、会話もなかなか続きませんでした。パートナーの言葉を聴いて段々と話す方法が理解できました。特に'あいづち'や話題を持ちかけるときの言葉はネイティブとの会話で非常に大事なことであり、ここでの経験で初めて知ることが出来ました。また、パートナーとはただ話すだけではなく様々な場所に一緒に出かけることで、海外での生活を体験することが出来ました。特に、飲食店や買い物などでは、店員とのやり取りや注文の方法、支払い時のチップの習慣など日本には決して経験できない貴重なものでした。プログラム参加中は夏休み期間ということもあり、独立記念日や夏祭りなどが多く開かれ、そのような場所でもアメリカ文化を肌で感じる事が出来ました。

大学院薬学研究科博士後期過程3年 廣岡康男
週末にはホームステイの企画もあり、またALP (American Language Program) の学生達と友人関係を築くこともでき、今でも英語でのやり取りを続けることで、プログラムの終了後も継続して英語に触れることが出来ています。

OSU 内の研究室への訪問時には、先生方とも親密な関係を築くことが出来ました。またセミナーにも参加させていただき、アメリカの学生たちの研究に対する姿勢も学ぶことが出来ました。

このプログラムでいきなり英語を話すことが出来るようにはなりませんでしたが、どのように勉強をすればいいか、またどのように話せば理解してくれるのかを知る良いきっかけになり、これからの研究においても非常に有益な経験になったと思います。

最後に、本プログラムに携わった静岡県立大学 GCOE 関係者の皆様、OSU の先生方（特に、担当講師のビル、コーディネーターの中山先生）、また快く訪問を承諾して頂いた Department of Chemistry の先生方に深くお礼申し上げます。



カンパセーションパートナー（左）と



訪問先の研究室でのセミナー風景

オハイオ州立大学での研修を終えて

私たち博士後期課程大学院生6名はグローバルCOEプログラムの一環であるShizuoka Health Sciences English Program (SHEP)に参加し、6月22日からの約6週間をアメリカ・オハイオ州立大学(OSU)で過ごしました。4月に報道された新型インフルエンザの影響を受けて一時はその実施が危ぶまれましたが、皆の祈りが通じたのか事態は好転し、6月に入り渡米が決定しました。6週間という期間は語学の習得において‘長い’とは言えませんが、研究に従事する者としては決して短くはありません。ですからこの貴重な時間を有意義なものとするために、1) 英語による研究発表能力の向上、2) OSUの研究者との学术交流、3) 多文化社会の理解に向けて、各自が精一杯にこの機会を活用し、多くのことを学んできました。ここでは研修中、私にとって特に印象的であった事をご報告させていただきます。

米国でも最大規模を誇るキャンパス内にはバスが運行し、地図を片手に道を尋ねることも尋ねられることも度々です。近代的な建物と歴史的建造物が混在する敷地内には州木であるトチノキを始めとした落葉樹が生茂り、リスを目にすることもよくありました。7月のオハイオは気候的にも過ごしやすく、夏季休暇のためにキャンパス内は穏やかです。静かな池の畔で行う宿題やプレゼンテーションに向けた準備などは思いの外捗るものです。

植物の研究を行っている私が見学してみたかった2つの施設と、2つの研究室を今回訪れることができました。植物分子生物学の研究において中心的な役割を担っている‘Arabidopsis Biological Resource Center’では、重要な研究材料が世界の研究者に向けてどのように配布されているのかを実際に見ることができました。‘Biological Science Greenhouse’は各地から集められた貴重な植物や研究用植物が栽培されている温室です。ここでは担当者による詳しい説明を聞くことができ、植物に関する興味深い知識を得ることができました。研究室訪問では、日本とは異なる研究室の在り方や雰囲気に戸惑いながらも、自分の携わる研究について英語で議論をするという貴重な経験をしました。さらに分子遺伝学部セミナーにも参加し、研究者や学生の活発な意見交換を目の当たりにしました。これらの機会は語学の向上という面においても、また研究者

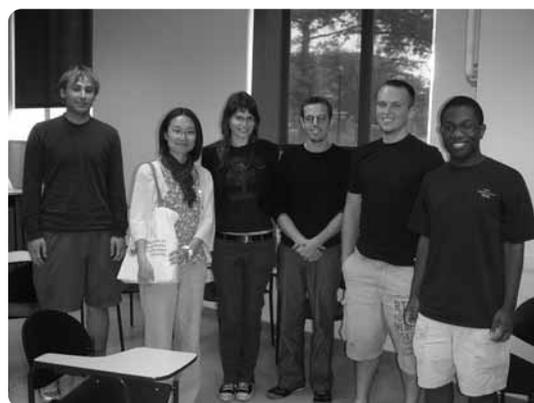
大学院生活健康科学研究科博士後期課程2年 梅根美佳
を志す学生としても良い刺激となり、本当に有意義な体験となりました。

このプログラムの特筆すべき点として‘conversation partner’の存在を挙げたいと思います。私たち研修生は英会話のパートナーとして各自1名のOSUの学生さんを紹介されました。私は、日本文学を専攻する学生さんと多くの興味と時間を共有することができてとても幸運でした。その会話は源氏物語といった古典文学から現在の北朝鮮問題、話題のマイケル・ジャクソンに至ります。この幅広い話題を通して、新たな英単語や自然な発音を学び、また日本という国について再認識することになりました。

私たちは7月4日の独立記念日を国歌斉唱と盛大な花火によって迎えました。オハイオで、新たな米国の友人とその日を祝えたことに、私は言葉では言い尽くせない感動を覚えました。今度は日本の花火を見上げながら、上達した英語でその再会を祝うことを約束しました。



参加した大学院学生、筆者は前列左端



カンパセーションパートナー（左から3番目）と日本文学を学んでいるOSUの学生達

国際交流

第7回SSEPを終えて

国際関係学部教授 吉村紀子

SSEP (Shizuoka Summer English Program) は、静岡県立大学とオハイオ州立大学（米国）のコラボレーションによって静岡県立大学生のために開発された3週間の短期海外英語研修プログラムです。2003年から始まりましたので、今年で第7回目の開催となります。

今回は、春からの新型インフルエンザの影響で開催できるかどうかかわからず、不安でしたが、6月に入り状況が落ち着いてきたこともあり、8月2日～21日（3週間）に開催されることになりました。開催決定が遅れたことで、参加者は1年生2名、2年生1名、3年生2名と小さなグループになりましたが、参加者にとっては‘個人レッスンの’な雰囲気でもよかったかもしれません。参加にはいろいろと事前準備が必要で、参加者にとって出発までの1ヶ月は大忙しでした。例えば、米国入国のためのESTAの取得（オンライン）、参加申込書の作成（英語）、推薦書作成の依頼、ホームステイのための自己紹介文の作成（英語）などを各自が一人で行いました。また、プログラム参加の助走ステップとして、7月からEnglish Tableを始めました。これは、英語での日常会話に慣れるのが目的ですが、本学の特任講師ノベナリオ・ケビン先生が毎回参加して楽しく学習できたのは効果的でした。

SSEPは、県大でのオーラルコミュニケーションの授業に連動するように企画されています。その特色として、まず、授業では、教科書を使用せず、ディスカッションとプレゼンテーションが中心であることが挙げられます。参加者は毎日の授業で一定のテーマについて発表しなければなりませんし、研究プロジェクトを実施してその結果を研修の最後にプレゼンテーションすることになります。次に、希望すれば、カンパセーションパートナー（CP）を利用することができます。この制度は、一人の県大生に一人のネイティブスピーカーが週6時間いっしょについてくれるという制度で、毎日の宿題の手伝いから週末の行事まで、英語で学習支援をしてくれます。日常的な英語会話の練習と学生レベルでの国際交流の実践です。また、参加者が研修期間中に1回コミュ

ニティーサービスをサービ斯拉ーニングすることもこの研修の利点です。サービ斯拉ーニングは、日本の学校教育ではまだまだあまりよく知られていない概念ですが、アメリカではよく実施されている活動で、実際の現場（特に学校外のコミュニティ）の活動を通して学ぶことがその基本的な目的です。SSEPでは、「Passport to Japan Program」をオハイオ州立大学のキャンパスの近くに住む子供たちのために実施しています。これは、日本の文化や日本語について子供たちに紹介する行事で、毎年とても好評です。それから、週末のホームステイがあります。オハイオ州はまだ‘よきアメリカ’が残っている中西部の州ですので、ある程度典型的なアメリカの家庭生活を体験できます。これは、まったくの無償のボランティアで州内のご家庭にお願いしているのですが、とても感謝しています。

さて、今年のスSEPを担当していただいたのはマリアンナ先生でした。彼女は、これまでオハイオ州立大学での日本の中高校の教師のための英語研修を担当したこともあり、今は、近郊の学校で障害児を教えている経験豊かな先生でした。私は研修の第3週目に授業参観に行ったのですが、彼女の最初のコメントは、「最初の2、3日は教室が静かであることかと心配したのですが、2週間目になって、みんながいろいろと話すようになったので、びっくりしています」でした。そして、修了式の時に彼女の述べた感想は、「3週目に入って、みんなの英語力はワァーット（ジェスチャー付き）と伸びて、本当に感激しました」でした。研修後のアンケートによると、参加者が英語に慣れたことに一番役立ったのは、CPの人たちとの日常的な交流・コミュニケーションとホームステイだったようです。今年は、CPは全員オハイオ州立大学の学部生でしたので、同じ大学生で、気があったようで、プレゼンの原稿の添削、研究プロジェクトの相談、またショッピングに行くなど、ほとんど毎日のように話していたようでした。

「Passport to Japan Program」は、今年は、第3週目に地域の図書館の集会室で実施しました。

参加した子供たちは12名で、ほとんどが幼稚園や小学校の低学年生で、お母さんたちもいっしょでした。他に、オハイオ州立大学日本学研究所から副所長のジャネットさん、助手のミッシェルさん、そしてもちろんマリアンナ先生も参加して、県大生は日本の位置や日本文化、日本語について英語で説明し、折り紙、習字、ゲームなどを英語のナレーション付きで実演をしました（写真1）。このナレーションは原稿を見ないでできるように、みんなで一生懸命に、時間をかけて練習をしたそうで、その成果が十分にでていて、よかったです。その後、子供たちが実際に体験することにしました。折り紙（紙飛行機、朝顔、鶴）をしたり、竹トンボで遊んだり、習字で自分の名前をカタカナで書いたり、県大生も子供たちもみんな楽しく学習しました（写真2）。実は、その前日からSSEPの視察も兼ねて、本学の鈴木理事長と法人本部・赤池副事がオハイオ州立大学を訪問されていましたので、学生たちと子供たちの学习交流を実際に見学・体験していただきました。理事長からは「学生たちが一生懸命に頑張っている！」という感想をいただきました。

研修最後の日は、午前中に研究プロジェクトの成果を発表するプレゼンテーションがありました。参加者全員がそれぞれの研究テーマに関してオハイオ州立大学の学生たちにアンケートをおこない、その

結果に基づいた発表でした。前日までに、発表用のパワーポイントファイルを作成し、当日は原稿をなるべく読まないように練習を重ねたそうです。その後の質疑応答には、鈴木理事長にも参加していただき、結構いろいろな議論ができてよかったかと思えます。午後の修了式では、オハイオ州立大学日本学研究所長のトランス教授と鈴木理事長より参加者に「3週間よくがんばったこと」「今後も英語学習をがんばるように」というスピーチをいただきました（写真3）。そして、プログラムコーディネータであるオハイオ州立大学の中山先生から参加者一人一人に修了書が手渡され、マリアンナ先生と一緒に記念撮影しました（写真4）。その後、サンドウィッチ・フェアウェルパーティーが開かれ、CPの学生たちやホストファミリーの人たちも来て、県大生はなごりおしそうに、話をしていました。そして、参加者は8月22日に無事帰国しました。

第7回SSEPは予定通り無事に実施できました。5人の参加者にとってよい学習の機会だったと思います。マリアンナ先生、オハイオ州立大学の関係者の方々、全面的にサポートいただいた木苗学長、六鹿国際交流委員長、小田原さん、佐治さん、落合さん、土屋さん、平井さん、それから視察に来ていただいた鈴木理事長、赤池さん、どうもありがとうございました。



(写真1) 地域の子供たちに日本文化を英語で説明



(写真2) 竹トンボの遊び方を教える



(写真3) 修了式にて



(写真4) 修了書を手にもリアンナ先生(右から3人目)と

リール政治学院留学体験記

僕は2008年9月から2009年6月までの約10ヶ月間、リール政治学院に交換留学していました。この約1年間はとても楽しく充実していました。主に勉強と遊びという2つの流れに沿って簡単に報告したいと思います。

勉強について

リール政治学院には自分を含めて日本人が4人だけでしたし、リールの町にも日本人はほとんどいませんでした。ですから外国語を学ぶにはとても恵まれた環境でした。学校で、僕は主に政治制度や世界の紛争に関する授業などをしていました。フランス語で授業を理解するのは困難で、最初はひとつひとつ理解できることを増やしていくという地道な作業を繰り返していました。もちろん家で資料を読んで勉強していくことも重要でしたが、なるべくフランス人の友達に聞くようにもしました。リール政治学院の学生は皆かなり優秀で、たいていの事はなんでも知っていたので、その点すごく頼りになったし、良い刺激を受けていました。プレゼンテーションの時はフランス語の添削もお願いしました。彼らと一緒に学んでいくなかで政治に興味、関心を持つようになりました。また、フランス語はできることを前提に話がどんどん進むので、語学は目的ではなく、手段であることを強く感じました。

遊びについて

フランス人の友達は、勉強に励む一方、遊ぶことにも一生懸命全力でした。毎週、週末には必ずバーや誰かの家に繰り出してはビールを飲んで夜遅くまでわいわいしていました。フランス人はおしゃべりが大好きで、特に恋愛の話はよくしました。エレガントなフランスの食事もご馳走になりました。幸いにもフランス人の友達に恵まれ、日々学校で話すことも多く、いろいろなイベントにも参加できましたし、学年末には友達の実家に呼んでもらって最高

国際関係学部国際言語文化学科4年 澤島未来

のヴァカンスでした。全体的に日本とは違い、彼らの余暇・休日は楽しむためにあり画期的でした。やはり語学力上達の面でも、日々フランス人たちと過ごせたことはかなり有意義でした。また彼らは日本についてあまり知らず、自分がいろいろ説明していたので、他国と比べつつ客観的に日本を見直すとてもよい機会でした。

フランス人とは別に、他の国の留学生たちともよく遊んでいました。いつも一緒にいた友達たちはクレイジーで、とても愉快でした。英語圏の人や英語のほうがよく分かりあえる人とは英語も使っていたのも楽しみのひとつでした。留学生と接することで視野は確実に広がり、小さな国から大国まで一つ一つの国を認識できるようになりました。そしてやはり国際交流はおもしろいと思いました。自分はずしをつくり、逆にイタリア人が作ったティラミスやスイスのチーズフォンデュなどを食べたりしながら互いの国のことについて話していました。今でも友人とメールでやりとりする関係を続けています！

一年を通して日本ではできない貴重な経験をすることができ、素晴しかったです。いろいろな人のおかげで、留学前に想像していたよりも満足のいく留學生活になりました。これからの生活に活かしていきたいと思います。最後に、このようなすばらしい機会を与えてくださった県立大学の方々には改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



友人と（左から二人目が筆者）

国際関係学部国際言語文化学科4年 千脇愛美

私は2008年9月から2009年の6月まで、フランスの北に位置するリールという町で学生生活を送りました。私がそこで主に専攻していた授業は、フラン

スの政治やEUについてのものでした。私たち留学生が取ることのできる授業には、エラスムスと呼ばれる留学生のための授業とフランス人学生のための

授業と2種類あり、特に後者の授業を理解するのは、フランスに着いたばかりの私にとってとても大変なことでした。学校が始まったばかりのころの私は、授業も内容を理解するというより単語を聞き取ることと精一杯で、その上フランスの内政は知らないことばかり、EUについては少しの予備知識があったものの、母国語ではない言語で勉強するとなると、その知識はあっても無いに等しいものでした。そんな私を助けてくれたのが、同じ授業を履修していたフランス人学生たちでした。授業のノートを写させてくれたり、わからないことや疑問に思った事を質問すると、簡単な単語を使って説明してくれたり、などいろいろ助けてもらいました。

留学生用の授業では、毎回あるテーマに沿った発表を行い、それについてみんなで議論をするという参加形態の授業でしたが、自分の意見を人前で言うということに慣れていなかった私は、他の国からやってきた留学生の積極的な姿勢に大きな感銘を受けました。そんな難しい授業も後期になると大分理解できるようになり、コミュニケーション能力が高まったことも相まって学校生活はさらに楽しいものになりました。

学校で体験した出来事の中で一番印象に残っていることは、後期に起こったストライキでした。フランスでは良くあることだというのは前々から知っていたのですが、まさか自分まで体験するはめになるとは思ってもいませんでした。幸いエラスムス用の授業はあまり中止されることはなく大した影響はなかったのですが、通常の授業の方は中止も多々あり、学校の正面入り口がブロックされているのを見たときの衝撃は今でも忘れません。

フランスへの留学は、自分自身にとって強い刺激になったということは今でも実感しています。外国に自分の身をおく事によって、日本を外から見たり、自分が日本人であるという実感が強まったり、など日本を離れなければ感じる事ができないことも知ることができ、自分の生まれた国、日本への関心が渡仏前と比べて高くなりました。海外で生活していると、日本と他国の違いを意識する機会が多く、日本に関する質問を投げかけられることもしばしばありました。彼らから質問されることによって、自分の国のことなのに実は深く知らないことがたくさんあるという事に気付かされました。そのような事がきっかけで、日本への興味が外国への関心と共に自然と高まりました。

この留学生活で得たものは非常に貴重であり、密度の濃い9ヶ月間でした。日本でもフランスで学んだことが活かせばいいと思います。最後に、このような機会を与えてくださった大学の皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



前列右から2人目が筆者

交流協定を締結している海外大学への短期留学・語学研修

本学は、現在までに世界11ヶ国16大学と大学間交流協定を締結しています。

現在、その内のモスクワ国立国際関係大学（ロシア）、フィリピン大学（フィリピン）、リール政治学院（フランス）に例年本学の学生が1、2名短期留学しています。

本年度9月からは、ボアジチ大学（トルコ）にも1名短期留学しています。

留学期間は、原則6ヶ月～1年です。

また、浙江大學（中国）、ニューキャッスル大学（イギリス）、オハイオ州立大学（アメリカ）で行われる語学研修、語学教育インターンシップ（オハイオ州立大学）にも参加しています。

夏期又は春期に行われ、期間は3週間程度です。

第5回日韓天然物化学談話会

日韓天然物化学談話会は2001年の第1回開催以来、1年おきに日本と韓国の2国間で交互に開催され、今年で第5回目を迎えました。今年の談話会の組織委員長は本学薬学部・医薬品製造化学教室の菅敏幸教授が務め、会場となる静岡県熱海市の和光純薬工業株式会社、湯河原研修所に参加者総勢61名が集まり3日間泊まり込みで熱い議論を交わしました。韓国側の講演者としてはSung Ho Kang教授 (KAIST)、Mahn Joo Kim教授 (Pohang University of Science and Technology)やSeung Bum Park教授 (Soul National University) など、有機合成、ケミカルバイオロジーの第一線の研究者を招待しました。日本側からは、福山透教授 (東京大学)、菅裕明教授 (東京大学)、渡辺賢司准教授 (静岡県立大学) ほか、総勢9名が招待講演を行いました。3日間のタイトなスケジュールで講演が続き、夜は10時近くまでポスター発表を行いました。その後、深

夜まで両国参加者の議論、交流が続き、談話会らしい親密な交流を得る貴重な機会となりました。次回開催は2年後、韓国で行われることになっており、次回の再開を互いに約束し、無事に閉会となりました。なお、本談話会は静岡県立大学グローバルCOEプログラム、日本学術振興会、内藤記念科学振興財団のご支援を得て開催されました。ここに厚く御礼申し上げます。



日本と韓国の参加者一同

経営情報学部教育実習報告

経営情報学部教職課程運営委員会

経営情報学部は、2005年度に教職課程が設置されました。所定の単位を取得することにより、高等学校教諭「商業」「情報」「数学」の一種免許状を取得することができます。本学部は、経営諸学（経営学、商学、会計学、公共政策）、情報学、数理統計学の各分野を組み合わせた教育を行っており、「商業」「情報」「数学」の免許状は、これらの各分野に対応して設置されています。

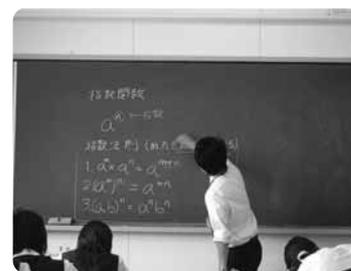
教職を目指す学生は、2年次から教職課程に所属します。「商業」「情報」「数学」のうちの1教科のみを希望している学生もいますが、多くは複数教科の免許状を希望しています。全3教科の免許状取得を目指している学生もいます（2年次以上の教職学生数と、取得希望教科を下記の表に示します）。

教職課程では、4年次に、高校で教育実習を行う必要があります。経営情報学部として教育実習生を高校へ送り出すのは、今年で2年目です。教育実習は2週間または3週間の短い期間ですが、各学生にとって、毎回の授業の指導案の作成、高校の先生方の前での研究授業、ホームルームや課外活動など、とても貴重な体験となっています。

教育実習を終えた学生のレポートには、「始めて教壇に立ったときは緊張して、何から話せばよいのか分からなくなった」「教師は生徒が見ていないところで多くの仕事をしていることが分かった」「研究授業は、予行練習や板書練習を念入りに行き、自分の持てる力を精一杯発揮できた」「最終日にはクラスの生徒から寄せ書きをもらい、感激した」「教育の奥深さとおもしろさを実感した」などの報告が寄せられました。

商業	情報	数学	人数
○	○	○	5
	○	○	7
○		○	2
○	○		1
		○	6
	○		0
○			0

計21



高校での教育実習

夏休み行事いろいろ

オープンキャンパスやキャンパスツアーの他にも、学部・大学院・研究所等が主催して、夏休み期間を中心に、多彩なイベントを行いました。

体験してみよう! 「薬の科学・健康の科学」 “夏休みファーマカレッジ2009”開催

県内高校生を対象とした「夏休みファーマカレッジ」が「薬の科学・健康の科学」をテーマに8月6日、7日の2日間にわたって開催されました。

この催しは、高校生に大学の最先端の研究に用いられている設備、機器を通じて薬学の最新の知識と技術に触れながら、薬学の世界を体験する機会を提供するもので、11回目を迎えた今年は83名の高校生が参加しました。

高校生たちは、白衣に着替え、「薬の効果を遺伝子で調べてみよう」「薬がなぜ効かないか調べてみよう」などの11の体験テーマに分かれて教員や大学院生の指導の下、実際に最先端機器などを操作して様々な実験に取り組みました。最後にこれらの実験結果は、報告会で発表され、熱心な討論が行われました。

今回参加した生徒の中からひとりでも多くの生徒が、将来、薬学の分野に進み、次世代の研究開発や高度医療を担ってくれることを期待しています。



参加者たち



薬の効果について実験

高校生が経営情報学部の授業を体験!

「オープンレクチュア2009開催」

経営情報学部高大連携事業実施委員会

「経営情報学部にはどんな授業があるのだろうか」をキャッチフレーズに、高校生を対象とした「経営情報学部オープンレクチュア」(第8回)が、6月21日(日)に開催されました。経営情報学部では、経営学と情報学の両方の知識や技術を持つ人材の育成に取り組んでいます。しかし、高校生にとっては本学部の授業は馴染みが薄く、分かりにくいものもあります。そこで、実際に高校生に授業を体験していただくのが一番と考え、この企画が生まれました。

オープンレクチュアでは、経営系の授業として「会社の社長は本当は何をしているのか?」と「あのヒット商品はどのように生み出されたのか? - 高校生のためのマーケティング入門-」、公共政策系の授業として「地域の盛衰を決めるもの - なぜ薩摩藩は幕府を倒せたか-」と「財政学 - 税のしくみ-」、情報・数理系の授業として「情報科学概論 - 音声処理の基礎-」と「コンピュータと幾何学 - コンピュータグラフィックの仕組みとは?-」の計6個の授業が行われました。

当日は、あいにくの雨空となりましたが、多くの方々にご参加いただきました。参加者総数は134名で、その内訳は、高校生108名、保護者23名、教員2名、一般1名でした。高校生の皆さんからは、どの授業も大好評で、保護者からは「よい授業を受けられて県大生は幸せですね」というコメントも寄せられました。今後には生かしていきたいと思えます。



公共政策系の体験授業

夏休み親子環境教室

～環境問題に関するいろいろな実験に親子で挑戦!～

環境科学研究所地域環境啓発センターでは、小学生とその保護者の方の環境問題に対する興味を促し、その意識の向上を目的とするとともに、小学生の子供たちが自らの意思で知的世界の探求に乗り出してくれるきっかけになればという思いを込めて、「夏休み親子環境教室2009」を8月8日(土)に開催しました。

また、静岡新聞・静岡放送「静岡かがく特捜隊」タイアップ企画とし、ご協力いただいた結果、静岡市内ばかりではなく、県内広範囲からご参加いただきました。33組の小学生とその保護者の方が、「バイオエタノールについて学ぼう」「リサイクルキャンドルを使って二酸化炭素の発生について学ぼう」「牛乳パックをリサイクル」「簡易浄水器を作って水をキレイにしてみよう」の4つの実験テーマそれぞれにおいて講義を受けた後、小学生が真剣に、かつ、楽しく実験に挑戦していました。その後、スライム、入浴剤、色が変わる粘土、プラ板、不思議な風車等の科学工作、いろいろなシャボン玉などに取り組みました。アンケートの結果から、参加者は夏休みの楽しい思い出になった様子が伺えました。



参加者



バイオエタノール抽出

「静岡かがく特捜隊 夏まつり09 inエコパ」に出展

環境科学研究所 助教 関川貴寛

「静岡かがく特捜隊 夏まつり09 inエコパ」(静岡新聞社・静岡放送主催、エコパハウス共催)が袋井市愛野のエコパアリーナで7月25日(土)、26日(日)に開催されました。2日間で約1万3000人が訪れ、会場には最先端技術を紹介するブースや科学実験を体験できるコーナーが並び、子供たちが楽しい実験や工作を体験するブースを満喫していました。

環境科学研究所の地域環境啓発センターでは、静岡かがく特捜隊の協力者として、「水をキレイにする微生物たち」というテーマで出展し、活性汚泥中の微生物を光学顕微鏡で観察できる体験型ブースを提供しました。説明員として、環境科学研究所より、岩堀教授(地域環境啓発センター長)、内藤助教、戸敷助教、関川、また環境工学研究室の大学院生(4名)が参加しました。

活性汚泥とは、人為的・工学的に培養・育成された好気性微生物群を主成分とする「生きた」浮遊性有機汚泥の総称であり、排水・汚水の浄化手段として下水処理場、し尿処理場、浄化槽などで広く利用されているものです。

本ブースにも多くの家族連れが訪れ(配布した資料は600部)、目にみえない世界の観察を通して、微生物たちが生活排水をキレイにするしくみや役割に関する知識を深めていただきました。



環境科学研究所のブース

サマースクール2009&富士山フィールドワーク

大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻 専攻長 下位香代子

環境研究に興味をもつ学部生の皆さんに、環境物質科学専攻の研究内容を知ってもらうこと、そして、私たちを取り巻く環境について一緒に考えてもらうことを目的として、8月20～21日にサマースクール2009を開催しました。県大と他大学の学部生合わせて9名が、遠くは三重県、埼玉県から参加してくれました。1日目は、3コース（「環境モニタリングの最前線」「太陽光線について学ぶ」「廃プラスチックのリサイクルと再資源化について学ぶ」）に分かれて研究室での環境実験を体験しました。夕刻からフィールドワークに合流し、本専攻の現役生、教員とともに、総勢37名がバスで裾野市にある富士教育研修所に移動しました。

今回のフィールドワークは、「富士山の環境」について、自然科学的・歴史的・文化的視点から総合的に理解することを目的としました。夕食後、県の文化学術局世界遺産推進室の小野主査に「世界遺産と富士山」についてご講演していただき、富士山のもつ文化的価値や世界文化遺産登録の可能性について学びました。その後、本専攻の岩堀教授が環境保全のために設置されたバイオトイレについて解説しました。セミナーの後の懇親会では、サマースクール生、現役生、教員皆大いに飲んで語り合い、そして、花火を楽しみました。

2日目は、朝早くから起床し、いざ富士山富士宮口新5合目へ。県の環境局自然保護室の中村副主任の説明を受けながら、オガクズ式バイオトイレが設置されている6合目の宝永山荘に向かいました。現地では、普段は立ち入ることのできない処理施設を実際に見学させていただきました。その後、宝永火口へと向かい、さわやかな風を受けながら、昼食をとりました。学生達は昨晚の寝不足もなんのその、頭上に見える頂上まで駆け上がりたようでしたが、今回の富士山登山はここまでにして、樹林帯を下り、次の目的地である高鉢周辺および須山周辺へ向かいました。高鉢周辺では、県の森林・林業研究センターの大橋主任研究員からニホンジカによる森林食害の説明を受け、富士山麓での食害による笹の衰退、モミの木などの樹皮食害による枯死など森林の中で、確実に進行している環境異変の実態を観察しました。ニホンジカが増えた原因は、温暖化による越冬のやすさ（大雪による餓死率の大幅な減少など）や妊娠率の大幅な増加などの様々な要因が考えられるとのことでした。

また、須山周辺では、富士山麓では希少種になったツキノワグマの捕獲現場（実際に8月17日には雌のツキノワグマが捕獲されたとのことでした）を案内していただき、ツキノワグマの生態調査について説明を受けました。このあたりは、大型レジャー施設が多い反面、一步森に踏み込むと野生のツキノワグマが生息するといった自然と人の生活が非常に近接している場所であるとのことでした。このあたりの森に入るときは、油断しないで、クマに出会わない工夫（声を出す、スズを持っていくなど）が必要とのことでした。

両日ともお天気にも恵まれ、1泊2日のサマースクール2009&富士山フィールドワークは無事終了しました。環境研究の原点は、フィールドを自分の目で観察することです。本行事を通して学生たちも環境を考える時に何が大切か理解を深めてくれたのではないかと思います。また、コミュニケーションが不足がちな現代にあって、学生同士、学生と教員間の研究室を越えたふれ合いを通して得たものが多々あったのではないかと思います。さらに、サマースクール生にあっては、今後の進路の参考になってくれたものと思います。

本行事は、伊吹准教授、谷（幸）准教授と助教の先生方によるワーキンググループが準備を進め、県職員の皆様にもご協力をいただきました。また、教員特別研究費をいただき、開催することができました。感謝する次第です。学生達の様子を見て、また、「参加してよかった！」という学生達の声を聞き、本行事を開催して本当によかったとつくづく思いました。



6合目にあるバイオトイレ



宝永火口にて



ニホンジカの食害について説明を受ける

アスリートと一緒に大学教授から食の不思議を学ぼう！ ～「食育アドベンチャーランド」今年も本学で開催～

食品栄養科学部 フードマネジメント研究室 准教授 市川 陽子
助 教 佐野 文美

8月24日(月)、本学食品栄養科学部棟の実習室およびグラウンドを会場に、(株)しょくスポーツ（こばたてるみ社長、東京）主催、本学食品栄養科学部共催、静岡ガス(株)、大塚製薬(株)、(株)エスパルス等協賛による「食育アドベンチャーランド2009・体験その2『創造の湖』」が開催されました。このイベントは、子ども達のスポーツ活動への参加と食育を結びつけた指導法である「スポーツ食育プログラム」を開発、実践している(株)しょくスポーツが、県内で年間に4～5回行うイベントの1回です。今回の参加者は、6～11歳までの子ども達とその父母ら10組27人。ゲストとして、サッカーJリーグ清水エスパルスより長沢駿選手が来校しました。当日の様子は朝日新聞、静岡新聞等でも報じられました。

本学食品栄養科学部との共催は今年で4年目になりますが、昨年度より栄養生命科学科の学生がインターンシップの形で「食育アドベンチャーランド」全ての回の運営に参加し、起業管理栄養士として活躍中のこばた社長から指導を受けています。この日は2年生の金田里奈さん、栗田千勢さん、山田真実さん、フードマネジメント研究室4年生の田中美也子さんがイベントをサポートしました。

当日は、「アスリートと一緒に大学教授から食の不思議を学ぼう！」と題し、1) 中山勉学部長、食品分子工学研究室修士2年生の中務真結さんによる食品科学実験 ①「飲み物の味と糖」：糖の異なる缶飲料の水中での浮き沈み実験、糖度の測定 ②「からだのさびつき（酸化）を食品で予防しよう!!」：ビタミンCやカテキンを含む飲料の抗酸化（色の変化）実験 2) 市川陽子准教授による県特産品に関する話、調理実習 3) 長沢駿選手による食体験にまつわるトークショー、サッカー体験が行われました。長沢選手は子ども達と一緒におやつ作りにも加わってくださり、話の中で子どもの頃からの食事、運動、生活習慣の意義や両親とのエピソードについて触れていました。子ども達は、文字通り「五感をフルに使って」、食べることの大切さ、動くことの楽しさを体験していました。



糖度測定実験
「コーラゼロは本当に糖度0だ！」



長沢駿選手を囲んで全員集合

奨学金をありがとうございました

「日本平留学生基金」入学祝金贈呈式

日本平留学生基金（代表：イトウ秀雄氏）贈呈式が5月22日に本学で行われ、今年入学した学部留学生13名全員（国際関係学部7名、経営情報学部6名）に1人ずつ入学祝金1万円が贈呈されました。

日本平留学生基金は、県立大学に在学している主として東南アジアからの留学生に金銭的援助を行うことを目的として平成8年にイトウ氏の還暦記念に設立された基金であり、今年で14年目を迎えました。イトウ氏の基金募集の趣旨に賛同した協力者は500を超える個人・団体にのぼります。

贈呈式でイトウ氏は「家族と自国のために努力し、健康に気をつけて精進してほしい。」と激励されました。留学生からは、代表の国際関係学部1年・陳海鴻さんがお礼の言葉を述べました。



地元企業からの奨学金

奨学生を募集する企業がそれぞれ論文テーマを定め、応募論文が優秀であると認められた学生に贈られる奨学金です。

「TOKAI奨学金」授与式

㈱TOKAI奨学金授与式が6月19日に本学で行われました。

本奨学金は、㈱TOKAIにより地域に密着した企業の事業の一環として設立され、今年度で18回目を迎えました。

「家庭用エネルギーの今後について」を論文テーマに募集し、看護学部4年・大塚弓子さん、薬学研究科博士後期課程1年・安藤正樹さん、薬学研究科博士前期課程1年・ディン・ティ・ホン・ニュンさんが選ばれました。

授与式では、㈱TOKAIの真室孝教常務取締役から認定書を贈られ、「自己を高め、未来の医療に貢献できるよう鋭意努力する所存です。」（安藤さん）など、奨学生がお礼の言葉を述べました。



「静岡ガス奨学生」認定証授与式

静岡ガス㈱奨学金授与式が6月23日に静岡市駿河区の静岡ガス㈱本社で行われました。

本奨学金は、静岡ガス㈱により、社会有用の人材育成に寄与することによって地域社会への貢献を図ることを目的に創設され、今年度で10回目を迎えました。

「自分自身の将来像について」を論文テーマに募集し、国際関係学部2年・木谷佳余さん、看護学部3年・下條志織さんが選ばれました。

授与式では、静岡ガス㈱岩崎清悟取締役社長から認定証を贈られ、「助産師の資格を得て、地域に開かれた助産院を開設したいと思います。」（下條さん）とお礼の言葉を述べました。



「万城食品奨学金」授与式

㈱万城食品奨学金授与式が6月25日に三島市の万城食品本社にて行われました。

本奨学金は、㈱万城食品により中国出身の留学生への奨学金支給を目的として設立され、今年度で13回目を迎えました。

「奨学金を利用して在学期間中、何について勉強したいか」を論文テーマに募集し、国際関係学部2年の李暁縈さんが選ばれました。

授与式では、㈱万城食品の米山寛代表取締役から目録が贈られ、李暁縈さんがお礼を述べました。



「静清信用金庫奨学生」奨学金授与式

静清信用金庫奨学金授与式が7月7日に静岡市葵区の静清信用金庫本部で行われました。

本奨学金は、地域社会の発展に貢献する静清信用金庫の基本方針に従い、次代を担う人材育成を目的に設立され、今年度で13回目を迎えました。

「地域金融機関に期待すること」を論文テーマに募集し、薬学部4年・成島大智さんと看護学部3年・柴田亜由子さんが選ばれました。

授与式では、静清信用金庫の白鳥良作理事長から認定書を贈られ、「奨学生としての責任感を胸に静岡という地域社会に貢献できる専門職を目指して更なる努力をし、今回いただいた以上のものを還元できるようがんばります。」(柴田さん)などとお礼の言葉を述べました。



「東海澱粉国際交流奨学基金」授与式

公益信託東海澱粉国際交流奨学基金授与式が7月22日に静岡市葵区の東海澱粉㈱本社で行われました。

本基金は東海澱粉㈱により静岡県内の大学院に在学しているアジア諸国からの留学生への奨学金支給を目的に創立され、今年度で12回目を迎えました。

「私の大学院での研究目的」「私の大学院での研究成果」を論文テーマに募集し、同基金の運営委員会の審議を経て、本学からは国際関係学研究所修士課程1年・ラクスマ・デワヤニさん、同じく楊丹妮さん、経営情報学研究所修士課程1年・レ・フン・カオ・クオックさんの3名が採用されました。

授与式では東海澱粉㈱の神野建二代表取締役社長から目録が贈られ、奨学生それぞれからお礼の言葉を述べました。



「清和海運奨学金」授与式

清和海運㈱奨学金授与式が7月22日に本学で行われました。

本奨学金は、清和海運㈱により、地域に密着した企業として経済的に就学困難な学生の援助をすることを目的に設立され、今年度で7回目を迎えました。

「あなたの考える静岡県の財産」を論文テーマに募集し、薬学部2年・佐々木彩乃さん、看護学部3年・吉原亜沙美さん、国際関係学研究所修士課程1年・高橋芽惟さんが選ばれました。

授与式では、清和海運㈱の宮崎總一郎代表取締役社長から認定書を贈られ、「研究に励み、感謝の気持ちを社会に還元していきたいと思います。」(高橋さん)など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。



「天野回漕店奨学金」授与式

(株)天野回漕店奨学金授与式が7月31日に本学で行われました。

本奨学金は、(株)天野回漕店により「共存共栄」の経営理念に沿って地域社会の発展に努め、地元静岡県の学生の奨学奨励に寄与することを目的に設立され、今年度で15回目を迎えました。

「自国と日本文化の違いについて。又、日常生活で感じていること。」等を論文テーマに募集し、経営情報学部2年・グェン・ホアン・リンさん、国際関係学部3年・韓剛さんが選ばれました。

授与式では、(株)天野回漕店の小長谷修誠取締役社長より認定書が贈られ、リンさんが「奨学金を受けた者として恥ずかしくないよう、頑張りたいと思います。」とお礼の言葉を述べました。



●地元企業等による本学学生への奨学金（返還義務なし）

名 称	給付金額	支給期間	応募資格	21年度採用人数
日本平留学生基金 (入学祝金)	年額 1 万円	一時金	外国人留学生のうち学部新入生	13名
(株)TOKAI	月額 5 万円	1 年間	全学生（科目等履修生、研究生を含む）	日本人学生 2 名 留 学 生 1 名
静岡ガス(株)	月額 5 万円	1 年間	学部生・大学院生	2 名
(株)万城食品	月額 5 万円	1 年間	中国からの留学生のうち学部 1～2 年生	1 名
静岡信用金庫	月額 5 万円	1 年間	静岡県内出身の学部生	2 名
公益信託東海澱粉 国際交流奨学金	月額 3 万円	1 年間	アジアからの留学生のうち修士 大学院生	3 名
清和海運(株)	月額 5 万円	1 年間	日本人学生（科目等履修生、研究生を含む）	3 名
(株)天野回漕店	月額 5 万円	1 年間	東南アジア・中国からの留学生のうち学部 2～3 年生	2 名
スルガ奨学財団	月額 5 万円	2 年間 (3、4 年次)	外国人留学生のうち学部 2 年生	1 名 (支給は21、22年度)
清水ロータリークラブ	年額 5 万円	一時金	外国人留学生のうち、他の奨学金を受給していない学部新入生	13名 (20年度実績)

この他にも様々な奨学金がありますので、詳細は

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/campuslife/life/002/index.html> をご覧ください。

お問い合わせは 054-264-5009（学生室）まで

活躍する卒業生・修了生

～経営情報学部・経営情報学研究科編～

銀行員として17年

1992年3月 経営情報学部卒業
現・静岡銀行勤務 宮本幸夫



経情会ホームカミングデーにて

県立大学を卒業して17年が経過しました。就職活動をしていた約19年前は、既にバブル経済は崩壊していましたが、まだ余韻が残っていたため就職活動は売り手市場（学生が有利な状況）だったと思います。

私は、静岡銀行に入行し、現在の菊川支店が5店舗目

となります。

銀行内部を大きく分けると、営業店・本部・関連会社に分かれます。今回は、特に私の勤務している営業店について、少しだけお話したいと思います。

営業店は、窓口・オペレーション・内国為替・出納・総務・融資・外国為替・渉外等に担当部署（係り）が分かれています。私は、渉外担当でいわゆる「外回り」（営業）を行なっています。その中でも「法人」を担当しており、会社の経理担当や社長と面談し新規融資の相談や事業計画・新規事業等へのアドバイス、景気・経済動向や地域の話題などの情報提供、資産運用や相続対策・金融派生商品（デリバティブ）・預金や積立などのセールス等を主に行なっています。

私が担当している取引先も、昨今の世界同時不況の影響もあり、かつてない厳しい経営環境におかれ

ています。このような状況中で、担当する会社のニーズや困っている事を聞き出し、素早く出来る限り対応していくことが、渉外担当としての役割だと思います。（時には厳しい事も言う場面がありますが…）

現在の業務で私が「やりがい」を感じる時は、自分がセールスした商品が、その企業や個人にとって役に立ったことを実感した時です。自分の仕事が「地域のためになった」「企業のためになった」と実感できた時、何とも言えない充実感・達成感を覚えます。お客様から「ありがとう」と言われる仕事を、これからも続けていきたいです。そしてもう一つの「やりがい」は、部下を立派な「静岡銀行員」に成長させていくことでしょうか。

プライベートでは、私も結婚して家内と中学1年の娘と小学4年の息子の4人家族、それとミニチュワダックスフンド1匹がいます。娘はバスケ部、息子はミニバス（スポーツ少年団）に所属しており、週末は私もバスケ漬け（配車当番や試合の応援）になっています。

先日、ミニバスの県大会の会場で、私が県大で4年間所属していた「旅行研究会 遊行倶楽部」の後輩と偶然再会しました。お互い父兄として応援に来ていたのですが、とても懐かしかったです。

取りとめのない話を徒然なるままに書いてみました。続きは、経営情報学部同窓会「経情会」にて

大学院でのディスカッションが今の業務に役立っています

2003年3月 大学院経営情報学研究科修士課程修了

現・モノプラス株式会社 (<http://www.monoplus.com>) 取締役 野村和臣

非正規雇用の社会人だった私の県立大学との御縁は、社会人聴講生として講義に参加させて頂いた事に始まりました。翌年、入学受験を経て経営情報学研究科へ進み、2年の充実した大学院生活を過ごした結果、無事社会への再出発を果たすことができました。現在は、創業間もないベンチャー企業ではありますが取締役を務めさせていただいております。

聴講生の私が選択した講義は、ディスカッションを中心としたものが大半でした。参加した講義のや

り取りにおいては、理解の及ばない言葉がいくつもありません。私は、飛び交う言葉をキーワードとしてノートに取り、後から調べるということを繰り返しました。参加→調査→再考→議論というサイクルを通じて、言葉とその定義を「面白い」と感じながら知識として吸収し、ディスカッションを通じて「刺激」を得るという体験をしました。当時のサイクルが今現在の私の活動の基盤になっていると言っても過言ではありません。

静岡県立大学経営情報学研究科は、自校の先生のみならず、他校からも多くの先生が講義を開いており、多様なテーマから様々なキーワードや考え方を耳にすることができました。また、研究科の学生は学部の卒業生のみならず元会社員や留学生など、立場も年齢も文化も様々で、思いがけない意見や考え方を耳にすることができました。耳にしたり、メモしたりするキーワードが増えるにつれ、目を通す書籍も増え、自分が話す語彙も増え、相手が何を言わんとしているのかを確認する能力を備えていきました。

大学院を修了後、ロジスティクス関連のソフトウェアベンダーでソリューション提案を中心とした営業職を約3年、ブリッジSEを約2年行いました。数多くの提案活動や、システム導入に関わる中、最も大切なことは相互の認識を合わせる事です。認識あわせには、県立大学に在籍していた際に見聞きした言葉や数多くのディスカッションが役立ちました。社会では、例え同じ言葉であっても、立場や職責が

異なると違う意味で使われているということは少なくありません。しかし、様々な言い方（表現方法）と言葉（キーワード）を様々な人や講義、書籍（文化）から見聞きしたという経験があったため、認識の相違を最小にできていると考えています。

県立大学の在校生の皆様におかれましては、多様な文化的背景を持つ方々との会話やディスカッションを楽しむ環境があるかと思えます。多くの言葉を交わすことで、自分の語彙を増やし、表現の幅を広げることにつながりますので、なるべく多くの人と会話やディスカッションをされることをお勧めします。



取締役を務める会社の前で

スキル指導におけるコミュニケーションを支援するシステムの開発

2009年3月 大学院経営情報学研究科修士課程修了

現・筑波大学大学院システム情報工学研究科博士後期課程1年在籍 渋沢良太

私は、本大学院修士課程を修了後、筑波大学大学院の博士後期課程に進学しました。当初は、修士課程修了後に就職を予定していましたが、経営情報学研究科において研究にやりがい、面白みを感じるようになりました。また、修士課程での自身の研究成果に納得できなかった為、進学を決意しました。就職後に進学する選択肢もありましたが、現在のテーマの研究を行うチャンスは今しかないと考え、そのまま研究を継続する道を選びました。

私は、看護師の基礎スキルであるフィジカルアセスメント（触診、視診、打診等）の遠隔学習支援システムの研究を2005年より行っています。本研究には、本学経営情報学研究科、看護学研究科、国際関係学研究科の先生方並びに学生と共同で取り組んでいます。本研究で対象としている問題は多岐に渡りますが、その中で私は、学習の客観視を支援するシステムの研究を担当しています。

私たちはこれまでの研究で、触診動作時の圧力分布を計測し、それを映像に即座に合成して提示するシステムを試作しました。右の写真は、そのシステムの表示画面です。本システムでは、身振り・手振りや言葉だけでは伝え難い事柄に対して、客観的な表現手段を提供することを目指しています。

現在の研究では、指導者と学習者が同一時間に同一場所に存在しない場面での学習にも本システムを活用できるよう、指導者の模範手技を記録しそれぞれの動作を比較できるように本システムを改良しています。またこの研究の他に、スキルのモデル化、打診音に関する客観的な学習指標の生成に関する研究も、本学の共同研究者の方々と進めています。今後、有意義な成果を発信できるよう、引き続き研鑽したいと思えます。



開発したシステムを操作する筆者とシステム表示画面

★次回は、看護学部・看護学研究科編を掲載します。

研究者を目指して

※研究者として国内外で活躍する卒業生・修了生を紹介するコーナーです。

コロラド州立大学に留学して

皆さん初めまして。私は、2009年3月に静岡県立大学大学院薬学研究科、薬品製造化学教室（現・医薬品製造化学教室）にて博士（薬学）を取得しました。現在、米国コロラド州立大学化学科 Williams 研究室にポストドクトラルフェローとして研究留学しています。今回、私の進路について紹介する機会を頂きましたので、コロラド州立大学および私の所属する Williams 研究室の紹介と海外留学という進路を選択した理由について紹介させて頂きたいと思います。

コロラド州立大学は、1862年に設立された博士課程までを有する米国の有名な総合研究大学です。全米各州と世界100カ国あまりの国と地域から学生や、博士研究員が大勢集まっています。私の所属する同大学化学科 Robert M. Williams 教授の研究室では有機化学を基盤とした研究を行っています。自然界の動植物が生合成する有機化合物のなかにはユニークな分子構造を有すると共に、人間にとって有用な生理活性を示すものが多数あります。私の仕事はそれら生理活性天然物質を有機化学的手法により合成し、様々な分野の共同研究者と共に、化学合成した天然物や、それらの誘導体の生理活性試験を行っています。また、動植物が複雑かつユニークな構造を持つ天然有機化合物を、どのようなメカニズムによって生合成しているのかを有機合成化学の手法を使って解明する研究も行っています。

それでは、私がなぜ海外留学という進路を選択したのかというと、海外で研究することへ強いあこがれがあったからです。私は、他大学で修士課程を修了し、博士課程から静岡県立大学大学院薬学研究科に所属していました。研究を始めた学部3年生の頃から、研究留学とは天然物合成化学の分野の実験や研究ができて、英語の勉強ができ、さらに海外に友人ができる、素晴らしい機会であると考えていました。博士課程3年の始めに、現在所属している Williams 先生に履歴書を送ったところポストドクとして採用して頂けることのお話を頂きました。それを機に、いくつかの財団に海外留学の助成金を申請したところ、当時所属していた研究室の教授である恩師菅敏幸先生のご指導もあり、奇跡的に上原記念財団の奨学生として採用され、研究室で三角フラスコ

2009年3月 大学院薬学研究科博士後期課程修了
現・米国コロラド州立大学化学科在籍 稲井 誠

を初めて持った日からの夢であった海外での研究を始めることができました（アメリカに海外留学する場合、海外で研究したいという強い信念が極めて重要ですが、金銭的な面も重要であり、アメリカで所属する研究室のボスから給料を頂くか、財団等の奨学生に採用されるかして、生活費を確保しておかなければ米国への長期滞在が許可されません）。実際に海外留学しアメリカでの研究生活を開始すると、研究は言うまでもなく日々困難の連続である上、生活面でも鉛筆一本、パン一個を買いに行くのにも高い英語の壁が立ちはだかり困難の連続です。しかし、これまでになく充実した日々を過ごしています。

私は半ば勢いと情熱のみで海外留学の道を選びましたので、あまり皆さんの就職に関する参考にはならなかったと思います。少しでも海外に興味があればぜひ海外留学の道も視野に入れてみてください。私自身も留学したばかりですが、日本では味わうことのできない体験ができ、日本人でない友人ができ、それらは一生の宝になると思います。また、皆さんも就職等で悩むことが多々あると思いますが、そのようなときは「自分は何がやりたくてここまで来たのか？」ということをもう一度考えてみてください。皆さんが本当にやりたい仕事を見つけ、社会で大活躍することを、大学OBとして、心からお祈りしております。



コロラド州立大学 化学科

平成21年度科学研究費補助金の採択状況（追加）

平成21年度に新規採択された研究代表者及び研究課題
特別研究員奨励費

三坂 眞元	薬学研究科博士後期課程 3年	緑茶と高脂血症治療薬の薬物動態学のおよび薬力学的相互作用の基礎及び臨床研究
森 大気	生活健康科学研究科博士後期課程 3年	システイン残基の酸化修飾を介した食品因子による蛋白質機能制御機構の解析
植草 義徳	生活健康科学研究科博士後期課程 3年	NMRを用いたカテキン類と生体成分との相互作用解析

継続課題の研究代表者

鰐淵清史（薬学研究科博士後期課程 2年）、田代京子（薬学研究科博士後期課程 3年）、頼盈伶（生活健康科学研究科博士後期課程 3年）、鈴木拓史（生活健康科学研究科客員共同研究員）

研究助成採択

平成21年度(財)旭硝子財団研究助成金

研究者：代表者 薬学部 教授 赤井周司
研究課題：酵素-金属複合触媒による多段階連続的不斉合成法の開発

平成21年度(独)科学技術振興機構 地域イノベーション創出総合支援事業（シーズ発掘試験）

研究者：薬学部 教授 赤井周司
研究課題：固定化オキソ金属触媒の開発と酵素触媒動的光学分割への応用
研究者：薬学部 教授 森本達也
研究課題：天然物クルクミン類緑化合物を用いた心不全治療の開発
研究者：経営情報学部 教授 松浦博
研究課題：音声セグメントを用いた発音訓練技術の開発

(財)先進医薬研究振興財団

研究者：薬学部 教授 森本達也
研究課題：天然成分クルクミンをリード化合物とした新規心不全治療薬の開発

(財)臨床薬理研究振興財団

研究者：薬学部 教授 森本達也
研究課題：新しい心不全治療薬の開発

平成21年度(独)日本学術振興会 国際研究集会事業

研究者：薬学部 教授 菅 敏幸
研究集会名：第5回日韓天然物談話会

内藤記念科学振興財団

研究者：薬学部 教授 菅 敏幸
研究課題：ケミカルバイオロジー手法による創薬研究

(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構

研究者：薬学部 准教授 渡辺賢二
研究課題：微生物の潜在的生合成能力を用いた次世代物質生産

(静岡県SOE助成)

研究者：薬学部 准教授 五十里彰
研究課題：細胞間タイト結合の役割とがん細胞における異常の分子機構の解明
研究者：薬学部 助教 高橋忠伸
研究課題：H1N1型インフルエンザウイルスのノイラミニダーゼタンパク質の酸性安定性を決定する分子機構とこの性質が関わるウイルス増殖促進機構およびパンデミック発生機構に関する研究
研究者：経営情報学部 教授 西野勝明（継続）
研究課題：産業集積の発展過程における環境変化と適応能力—産業集積生態論の視点から—

(財)杉山産業化学研究所

研究者：薬学部 助教 清水広介
研究課題：がん標的化DDSキャリアの新規開発とがん治療への応用

(財)日本科学協会 笹川科学研究助成

研究者：薬学部 助教 横山英志
研究課題：新規な基質特異性を有する膜結合プロテアーゼの切断機構解明のための結晶学的研究

平成21年度(財)糧食研究会一般研究助成

研究者：代表者 食品栄養科学部 教授 中山 勉
 分担者 食品栄養科学部 助教 石井 剛志
 研究課題：乳タンパク質による緑茶カテキン類の安定性及び嗜好性の改善作用

(財)ソルト・サイエンス研究財団

研究者：食品栄養科学部 教授 鈴木裕一
 研究課題：小腸Na⁺代謝と栄養素吸収におけるタイト結合部の役割

平成21年度文部科学省戦略的研究基盤形成支援事業

研究者：分担者 国際関係学部 講師 松森奈津子
 (代表者は関西大学 教授 孝忠延夫)
 研究課題：マイノリティと法—21世紀における「国家と社会」のパーспекティブ

平成21年度静岡県産学交流センター 地域課題に係る産学共同研究委託事業

研究者：経営情報学部 教授 岩崎邦彦
 研究課題：緑茶を活用した静岡型ツーリズムの研究

平成21年度(財)静岡総合研究機構学術教育研究推進事業費補助金 (学会開催助成)

研究者：環境科学研究所 教授 下位香代子
 学会名：日本環境変異原学会第38回大会

(財)喫煙科学研究財団

研究者：環境科学研究所 准教授 雨谷敬史
 研究課題：(特定研究) 日常環境下におけるETS個人曝露量の測定・評価に関する研究「浮遊粒子状物質、ワネロール、多環芳香族炭化水素、ニトロソアミン」

研究者：環境科学研究所 准教授 伊吹裕子(継続)
 研究課題：ヒストン修飾を指標としたタバコ副流喫中化学物質の生体影響評価

平成21年度環境省循環型社会形成推進科学研究費補助金 (継続)

研究者：分担者 環境科学研究所 助教 関川貴寛
 (代表者は鳥取大学大学院工学研究科 教授 細井由彦)
 研究課題：人口減少を踏まえた生活排水処理施設整備手法の評価システムの構築

受賞

■日本薬学会奨励賞を受賞

薬学部生体情報分子解析学分野の五十里彰准教授は、3月26日から3月28日まで京都で開催された日本薬学会第129年会において、平成21年度奨励賞を受賞しました。同賞は薬学の基礎および応用に関し、独創的な研究業績をあげつつあり、薬学の将来を担うことが期待される若手研究者に授与される賞です。今年度は、化学系、物理系、生物系、医療系の4部門をあわせて、8名の受賞者が選ばれました。受賞の対象となった研究テーマは「腎尿管における電解質輸送体の分子病態生理学的研究」で、マグネシウム輸送体の分子実体、生理・病態生理的な調節機構、薬物の作用機序などを解明し、生活習慣病の新しい予防薬や治療薬の開発につながると期待されます。五十里准教授は、薬学会会頭の松木則夫教授から表彰楯と副賞を授与され、国立京都国際会館で受賞講演を行いました。



五十里准教授

■日本ソフトウェア科学会 第13回論文賞 (2008年度) を受賞

経営情報学部の斉藤和巳教授は、日本ソフトウェア科学会より、第13回論文賞(2008年度)を受賞し、6月11日に東京大学山上会館での贈呈式で表彰状が手渡されました。

同賞は表彰年度の前年の最終号までの過去1年間に日本ソフトウェア科学会の学会誌に掲載され、とくに優れた年間2件以内の論文に授与される賞です。

受賞の対象となった論文は、24巻1号pp.81-90 「人間関係の重なりを持つコミュニティ構造の抽出」で、人間関係のネットワークから活発な人間で構成されるコミュニティ構造を互いの重なりを許容しながら抽出する新手法の提案により、多様なソーシャルネットワークの分析を可能とし、各種応用にも道を開いたことが評価されました。



斉藤教授

■第62回日本酸化ストレス学会で優秀演題賞を受賞

生活健康科学研究科食品栄養科学専攻の生化学研究室の博士後期課程3年頼盈伶さんが、6月11～12日に九州大学医学部百年講堂で開催された第62回日本酸化ストレス学会において優秀演題賞（ポスターアワード）を受賞しました。発表タイトルは“OLETFラット2型糖尿病発症過程におけるNO産生に関わる酵素活性の変動”で、青山沙絵、大塚菜未、塩川秀美、三好規之、大島寛史との研究の成果を発表し、生活習慣病発症メカニズムに関する基礎的データの報告が評価され受賞に至りました。



頼盈伶さん

■第18回環境化学討論会でナイスプレゼンテーション賞を受賞

6月9(火)～11(木)に、茨城県つくば市で開催された第18回環境化学討論会において、大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻博士後期課程3年の山田建太さん（物性化学研究室）が、ナイスプレゼンテーション賞（学生セッション部門）を受賞しました。

この部門は、大気、水質、土壌、生物、廃棄物、食品、生活用品などの分野で、化学物質と環境の保全や改善に関する研究内容を、口頭及びポスター発表するものです。山田さんの受賞演題は「殺虫剤TEMEPHOSの光分解と変換生成物のエストロゲン受容体作用能評価」で、寺崎正紀、牧野正和との研究の成果を発表し、殺虫剤分解生成物の環境ホルモンリスクに関する報告が評価され受賞に至りました。



口頭発表する山田さん

■平成21年度静岡県男女共同参画社会づくりに関する知事褒賞（チャレンジの部）を受賞

7月25日に静岡県男女共同参画センター「あざれあ」で開催された「男女共同参画の日」県民フェスティバルにおいて、本学のクラブ活動団体「静岡学生NGOあおい」が、静岡県男女共同参画社会づくりに関する知事褒賞(チャレンジの部)を受賞しました。

この賞は、静岡県男女共同参画推進条例に基づき、男女共同参画社会作りに積極的に取り組んでいる個人・団体・事業所を静岡県知事が表彰するもので、「チャレンジの部」はとくに女性のチャレンジ促進を目的に社会の様々な分野で活躍する女性や団体を対象としています。「静岡学生NGOあおい」は、設立以来4年にわたり、児童買春の防止とその被害者支援をめざして、女性を中心とする本学学生による国際的社会活動団体として着実な成果を挙げる活動を行ってきており、男女共同参画社会づくりに向けた新たなチャレンジの可能性を示すその内容が高く評価されたものです。



副代表の山本ちひろさん
(右側・国際関係学部3年)

図書館だより

2008年度の図書館資料の貸出冊数は、31,088冊と4年ぶりに増加し、学生・院生一人当たりの貸出冊数は9.7冊とアップしました。今回の図書館だよりでは、2009年4月から8月までの期間に、学部生・院生によく借りられた図書の一部をご紹介します。

貸出ランキング：貸出ベスト10

貸出回数が多い図書は、授業や学習に必要な図書が圧倒的に多くなっています。貸出の上位にランキングされてはいませんが、小説では村上春樹の最新作『1Q84 (ichi-kew-hachi-yon) : a novel』や『ノルウェイの森』がよく借りられています。ほかに、「ハリー・ポッター」のシリーズなども人気があります。

順位	書名	著者名	貸出回数
1	ボルハルト・ショアー現代有機化学問題の解き方	N.E.Schore [著]／大島幸一郎訳者代表	37
2	楽園・味覚・理性：嗜好品の歴史	ヴォルフガング・シヴェルプシュ著／福本義憲訳	31
3	看護技術を基礎から理解！ (写真でわかる基礎看護技術：1)	[吉田みつ子ほか執筆]	27
4	危機の二十年：1919-1939 (岩波文庫:白-22-1)	E.H.カー著／井上茂訳	23
5	地域看護学概論 (標準保健師講座：1)	奥山則子著者代表	21
5	スキルアップ分娩介助：介助の基本から緊急対応まで	飯田俊彦編著	21
7	地域看護技術 (標準保健師講座：2)	中村裕美子著者代表	19
7	周産期の臨床手技106：妊娠から出産・育児までのケアマニュアル	進純郎編著	19
9	入門価格理論 第2版	倉澤資成著	18
10	術中／術後の生体反応と急性期看護 (周手術期看護：講義から実習へ：2)	竹内登美子 [ほか] 著	16
10	New認知症高齢者の理解とケア 新訂版	石束嘉和、山中克夫編集	16

・2009年4月から8月までの集計です。

《本学教員からの寄贈著書》

図書館では、先生方に寄贈していただいた著作を、図書館2階「自由閲覧室」に配架しています。先生方の最新の研究成果に是非触れてみてください。()は図書館の請求記号です。2009年5月から8月までに図書館に寄贈していただいた先生の著作は次のとおりです。

・稲田晴年先生 (国際関係学部)

『ヨーロッパ文化の扉』静岡県立大学国際関係学部ヨーロッパ文化コース編 (304/Sh 94)

・松田正己先生 (看護学部)

「宇宙論と生命論」松田正己、立木孝夫著 『釣耕苑対談集 一百八人が紡いだこころー』 邑心文庫 (041/C 53)

・古賀 震先生 (短期大学部)

『医学書院医学大辞典』第2版 古賀震ほか執筆 伊藤正男ほか編集 (490.33/I 23)

シリーズ 私の1冊の本

図書館では、「私の1冊」と題して、先生方が今までに読んで、感動し心に残った本をシリーズで紹介しています。

紹介された図書は、県立大学附属図書館の書架に配架してありますので、まだ読んでいない方は是非この機会に読んでみてください。また、すでに読んだことがある方には、あらためて読み直してみることをお勧めします。以前読んだときの思い出が呼びさまされたり、あるいはこれまで読んだ時とは違った新たな感動がみなさんの心に響くことと思います。

経営情報学部 准教授 大平純彦

紹介図書名：『日本百名山』

著者名：深田久弥

出版社名：新潮社

I S B N : 978-4-10-318405-8

図書館所蔵：閲覧室 2階 291.09/F 71



夏休みをどのように過ごしたかゼミ生に聞くと、ドライブ旅行という答えが多く、登山と答える人はまれである。昔は山岳部やワンゲルに属さない普通の学生でもよく山に登ったものであるが、時代は大きく変わってしまったようである。深田久弥の『日本百名山』をすすめるのは、読書の楽しみとともに夏山登山の楽しさを知ってほしいからである。

深田久弥は「日本は山国である。どこへ行っても山の見えない所はない。市や町や村を見おろす形のいい山が立っていて、その学校の校歌に必ず詠みこまれるといった風である」と指摘し、「日本人の心の底にはいつも山があった」と書いている。それは文学的に誇張した表現であるが、私流に割り切れば、日本という国土に育ったからには、山（それに温泉を加えたいが）を楽しまないのはもったいないということである。

『日本百名山』は、深田久弥が「わが国の目ぼしい山にすべて登り、その中から百名山を選んでみよう」と思いつき、それを20年近くの歳月をかけて完成させ、東京オリンピックの年に刊行したものである。100の山について、歴史的な考察、文学作品における記述の紹介、山行の記録などを織り交ぜて、その魅力がそれぞれ2000字ほどの簡潔なエッセイにまとめられている。たとえば、富士山について「この日本一の山について今さら何を言う必要があろう」と文献の多いことの紹介から始め、「世界各国にはそれぞれ名山がある。しかし富士山ほど一国を代表し、国民の精神的資産となった山はほかにないだろう」という評価を与えている。

深田は、①山の品格、②山の歴史、③山の個性の3つの基準に、1500メートル以上という標高に関する条件を加えて、全国の山から百名山を選定した。「麓から眺めるだけでは十分でない。…絶頂を踏まねば承知できなかった」とあるように、すべて山に登ったうえでの選定であり、その結果に「自信を持たせてくれたのは、五十年に近い私の登山歴である」と述べている。戦後の混乱した時期に百名山を選ぶのは大変な作業であったろうが、深田が選んだ百名山は、多くの人を納得させるものであった。百名山を対象とするガイドブックや地図が刊行されたり、百名山を紹介するテレビ番組が作られたり、百名山の登山記録を掲載するホームページが作られたり、現在においても深田による百名山は登山愛好者が登る山を決める際に決定的な影響を与えている。

静岡の山というと富士山をあげるのは自然なことである。だがその一方で静岡県と長野県、山梨県の県境が南アルプスの主稜線に重なり、南アルプスの南部が静岡市に属していることが十分に認識されていないのは残念なことである。実際、百名山のうち、間ノ岳、塩見岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳の5山が静岡市に属しており、穂高岳、槍ヶ岳などを有する松本市と並んで、静岡市は市町村レベルではもっとも多くの百名山を有する市となっているのである。深田は「二月のある晴れた日、私は静岡に行き、その海岸から遥かに南アルプスを眺めた。聖、赤石、荒川、悪沢などの雄峰が純白に輝いていて、その前に光岳があった」と書いているが、冬になると県立大学の正面からも白く輝く南アルプスの山々を目にすることができる。

南アルプスに登るには、新静岡から南アルプス登山線のバスで畑薙第一ダムまで、そこから東海フォレストのバスで榎島に向かい一泊。翌日、頑張れば、塩見岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳などの山頂からの雄大な眺めを堪能することができる。『日本百名山』を読んだ上で、地の利を生かし天気の良い日を選んで登ることをおすすめしたい。

食育月間におけるコンビニ商品の企画・開発に携わって

食品栄養科学部フードマネジメント研究室 4年

伊藤 望、田中美也子、樋口 泉

2009年6月、食育月間における静岡県厚生部の取組みの1つとして、静岡県、県と「地域活性化包括連携協定」を締結しているセブン-イレブン・ジャパンおよび本学食品栄養科学部フードマネジメント研究室が、協働によりお弁当と2種類の惣菜（デリ）を開発し、6月16日～7月6日（惣菜は13日）の期間、県内セブン-イレブンおよびイトーヨーカドー全店で販売しました。

商品の企画・開発は、県の食育月間テーマ＝「野菜大好き！！」（野菜摂取量の増加）に合わせ、本研究室の4年生3名と大学院生2名（若杉悠佑、遠藤亮）、昨年度卒業生1名（三松泰子）が行いました。“栄養学を学ぶ学生”と“消費者”の2つの視点から、性別や年齢など様々な客層に合わせて商品コンセプトやレシピを考え、試作検討会では、約40種類のおかずを提案しました。その後、関係者で検討会を重ね、初回打ち合わせから2か月で商品が完成しました。

出来上がった商品の1つである「野菜っていいら！しぞーか弁当」（¥580）には、1日に必要な野菜の1/3量を無理なく摂取できるよう、さまざまな工夫をしました。ハンバーグに細かくした野菜を混ぜこみ、緑黄色野菜であるかぼちゃを使用したミルク煮を取り入れ、デザート感覚でも楽しめるようにしました。味付けに関しても、何度も意見交換を重ね、調理の工夫でコンビニ弁当では実現が難しかった食塩量の低減に成功しました。

お弁当以外の商品として、和風デリ・洋風デリ（各¥380）も発売されました。これは、私達自身がパンやご飯に合わせられるおかずセットが欲しいと思っており、提案したところ、商品化が実現したものです。和風デリには「お袋の味」を並べ、幅広い年齢層に対応したものとなりました。洋風デリでは、洋食で高くなりがちな脂質に配慮し、定番のチキンのトマト煮やデザート感覚で食べられるかぼちゃサラダを入れ、女性に人気の商品となりました。

商品を考える上で苦労したことは、家庭と工場での調理法の違いや、流通温度帯の制約を配慮したおかず選びでした。また、6月は野菜の端境期で、使用野菜が重複したものもありましたが、調理法や味付けで変化をつけました。

今回の事業を終えた研究室全員の感想は、「本当に勉強になった」ということです。3年以上栄養学を学んできた者として、消費者に食べてもらいたい食事の理想像はいくらでもあります。その理想は大切ですが、「商品」という形で世の中に出すことを考えると、大きな壁があることを実感しました。その壁をどのようにしてクリアしていくかが、今回の食育弁当の取組みの中で最も重要なことだったように思えます。不況下でより安い弁当に注目が集まる中、苦戦もしましたが、新しい客層の獲得にはつながったようでした。商品は、1つ世の中に出すのにも多くの人的・物的資源と時間がかかれています。発売されたお弁当や惣菜セットは、わが子のように感じられ、友人や家族、周りの人達に何度も勧めてしまいました。発売され、周囲の反応も良かったからこれで終わり、ということはありません。今回の実践活動は、本研究室のテーマである「食環境の整備」について学ぶ者として、消費者、製造者、販売者のニーズを的確に捉え、それを商品作りに取り入れていくシステムを考える生きた経験になったと思います。

最後に、県民の皆さんが食育や野菜の摂取量について意識するきっかけ作りに、少しでも貢献できたことを願っています。



発売日にコンビニ店頭で
中央3人の左から順に田中、伊藤、樋口

スウェーデン訪問記

大学院生活健康科学研究科博士前期課程 1年
食品分析化学研究室 水田真央

私は8月12～17日にスウェーデンを訪問しましたが、そのきっかけは、当研究室と環境科学研究所生体機能学研究室とで昨年発表したベリー果実に関する論文がきっかけです。その論文をスウェーデンの研究者の人が見つけ、先方から共同研究の申し出がありました。今回、今後の共同研究に関する話し合いとベリー果実の現地調査を行うため、当研究室准教授の熊澤先生、環境科学研究所助教の榊原先生とともに、スウェーデン北部のウメオへ向けて旅立ちました。

ウメオでの共同研究に関するミーティングでは初めての英語発表を行いました。日本で何回も練習したこともあり、何とかうまく発表することができました。ベリー果実の現地調査では、景色の良い森の中で、さまざまな種類の自生しているベリー果実を観察しました。スウェーデンではベリー果実の収穫期は夏ですが、たくさんのタイ人を雇ってベリー果実を採っており、その様子も見せてもらいました。

現在、私はベリー果実の中でも、クローベリーを中心に研究しています。クローベリーは、スウェーデンではその辺に生えているありふれた植物なので、現地では雑草のように扱われているようです。その雑草のようなものを調査するために、日本人がわざわざスウェーデンにやってきたことがとても珍しかったらしく、私たちはウメオの地元新聞社の取材も受け、記事になりました。

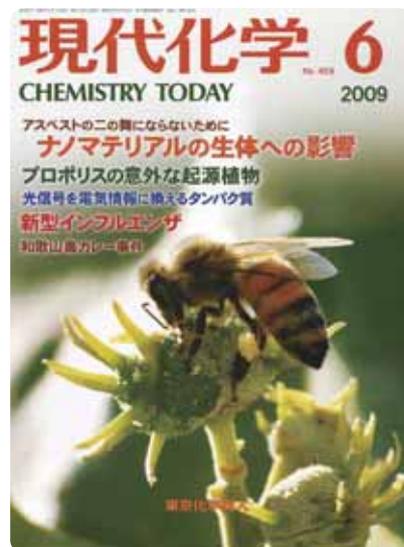
今回スウェーデンを訪問して、ベリー果実を実際に見て触り、現地でしか決して得られないことを知り、貴重な体験ができました。今回の体験は、私のこれからの研究のモチベーションを上げてくれそうです。

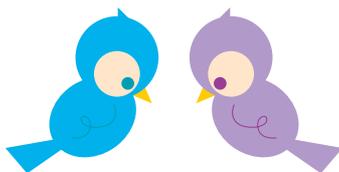


私たちの記事が掲載されたウメオの地元新聞（8月18日発行）

研究成果が学術雑誌の表紙に

国内の化学啓蒙誌である「現代化学」（発行：東京化学同人）の2009年6月号に、食品栄養科学部食品分析化学研究室・熊澤茂則准教授が執筆した「ミツバチに学ぶ有用植物資源—沖縄産プロポリスの意外な起源植物—」と題する総説記事が掲載され、その研究成果（植物とミツバチの写真）が表紙を飾りました。プロポリスとは、ミツバチが特定の植物を自分の巣に集めてきてつくる物質ですが、この記事は、熊澤准教授が沖縄において数年前から取り組んでいたプロポリスの起源植物（原料となっている植物）発見に至る過程を解説したものです。今回、沖縄産プロポリスの起源植物として発見した植物は、現在新たな機能性植物素材として企業と共同研究が進められています。





国際関係学部「学生活活性化プロジェクト」の採択決定

平成21年度国際関係学部キャリア支援委員会（津富宏委員長）の「学生活活性化プロジェクト」は、平成18年度から始めた学生の自主企画に対する資金援助プログラムで、社会への積極的な関与を促進し、主体的な生き方を形成するための新しいキャリア支援のかたちとして、毎年学生から多数の応募があります。

今年度は、7月15日(水)に採択企画への助成金と証書の授与式を開催しました。国際関係学部長室に全9件の学生による自主企画の代表が集まり、富沢寿勇学部長から一人ひとりに証書が渡され、激励の言葉をいただきました（採択企画は、下表のとおり）。

今年度中に成果の発表会を開催しますので、是非お越しくください。開催日時等詳細は、決定次第、以下のホームページでお知らせします。

URL : <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/event/index.html>

お問い合わせ先 : 054-264-5331、5254

(国際関係学部 八木、澤田)

団体名	企画名
DREAM SEEDS	就活準備合宿
学生団体活性化委員会DD	第四回学生団体活性化合宿
静岡学生NGOあおい	児童買春啓発雑誌出版プロジェクト
リトルワールドキャン プ実行委員会	リトルワールドキャンプ6
DREAM SEEDS	キラキラ～輝く女性の働き方～
湖中ゼミ3年	CHAINGE —CHAIN × CHANGE— ～あなたの日常は世界とつながる～
津富ゼミ6期生	人生トラベル ～人生の先輩に学べ～
GEL	つながるからつなげるへ
POC	ファシリテーションフォーラムin県大



富沢学部長（右側）から証書の授与

ニュース&トピックスを公式サイトへ！

教職員・学生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動など様々な情報について、県大公式サイトへの掲載を是非お願いします。また、はばたきへの寄稿もお待ちしています。大歓迎します。

公式サイトへの掲載は、各部局の公式サイト担当者まで（不明な場合は、広報室までお問い合わせください）。

はばたき寄稿は、教育研究推進部・広報室（はばたき棟3階）までお願いします。

E-mail: koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学事務局広報室（事務局 TEL 054-264-5130）

静岡県立大学ホームページアドレス: <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>